『中島鉄砲火薬店』

時は明治。

西南戦争が終わって数年後。

当時の人々がそれを日本最後の内戦と認識していたかどうかは謎として、ともかく明治も十数年を過ぎ、ボンヤリと武士の時代の終わりを納得しつつ、好むと好まざるに関わらず誰もが新しい時代に身を投じていた頃のこと。

静岡県は浜松。

商家のような農家のような不思議な家屋。広い畳敷きの部屋。濡れ縁。土間。そんな家。

剣道の道具一式が転がっていたり、画材道具が転がっていたり、それでいて農具も転がっている。暮らし向きはそれほど豊かではなさそうである。

男が一人寝ている。

中島登。「色が抜けるほど白く、目が細く、その下には大きなホクロが目立ち、いかにも疳の強そうな～」などという記録も残っているが、まあ中年である。白髪まじりの総髪。白の胴着に藍の袴、稽古着のまま寝てしまったようである。

時々、睡眠時無呼吸症候群よろしくイビキが途絶える。

手近な柱には竹刀袋が立てかけてある。

客席をウロウロしている男が一人。旅姿の中島登一郎。

登一郎　おかしいな、この辺のはずなんだが。（お客さんに）あ、どうも、どちらからいらっしゃったんですか？（お客さんのリアクションに即したインプロ）東京から？　この浜松まで？　それはそれは遠路はるばる。僕と一緒ですねぇ。え？　浜松ですよ、ここは。誰がなんと言おうと浜松なんです、ええ、もうそれは絶対、鉄の掟で。いや、ちょっと迷子になっちゃいましてねぇ。東京から浜松まで旅をしてきたんですが…しかしみなさん、なんだかおかしな服装をしてますねぇ。ん？　私の方がおかしな恰好をしてる？　言われてみるとそんな気もしますねぇ。これはひょっとして…（お客さんに）あの、あすいません、ちなみになんですけど今って何年ですかね？

平成？　あ、すいません西暦でお願いできますか？　僕わかんないんで。ああ、なるほど、２０１２年。僕が八王子を出て浜松に向かったのが明治１２年だから西暦で言うと１８７９年。（お客さんに）２０１２引く１８７９は？　ごめんなさいねぇ、急になんだって話ですよねぇ。えーと、２０１２引く１８７９は１３３だから、１３３年！　どうやら僕は場所だけじゃなくて時間まで迷子になっちゃったみたいですね。まいったな。父を訪ねてわざわざ浜松くんだりまでやってきたんですけどね。あ、申し遅れました。わたくし、中島登一郎と言います。いや～しかし弱りましたね。あ、ところでみなさんは今日はなんの集まりなんですか？　なんだから美しい御婦人ばかりで、美人祭りですか？　美人祭りって、なんですか？　自分で言っといてなんですけど。え？　芝居？　これから芝居が始まるんですか？　あ～じゃあ僕も見て行こう、時間できちゃったし。あ、でも席が（券売状況次第でインプロ）満席かあ、人気あるんですね、この芝居。あ、みなさん、芝居を観る際は音の出る箱のとどめは刺しておいて下さいね。ええ、僕のいた明治時代にもあったんで、音の出る箱の諸注意は、ええ、あったんです。いや～、しかしどんな芝居なんだろ。面白いと良いなぁ。ね？　ですよね？

舞台上の登に薄く光があたる。

登一郎　あー！　あれ！　父上だ！　僕がこれから会いに行こうとしてた！　え？　これはひょっとして父上のお芝居？　…どうかな～？　あの人が出てくる芝居なんでしょ？　う～ん。いや、だってね、酷い人なんですよ、あの人。僕はね、子供の頃にあの人に捨てられたんですよ。それがね、何を思ったのか、今頃になって「一緒に暮らさないか」なんて手紙よこしてきて…どうせね、この芝居だって、いいカッコするに違いなんですよ。生き別れた息子を引き取った良い父親を演じようとするに決まってますよ。ホントはそんなじゃないくせに。…てかあれじゃん、父の物語ってことは僕、絶対出てくるじゃん。あー、どうしよ、ホントはあっちに行かなければいけなかったんだなぁ。まあ、いいや、えーと。

　時は明治。西南戦争が終わって数年後。当時の人々がそれを日本最後の内戦と認識していたかどうかは謎として、ともかく明治も十数年を過ぎ、ボンヤリと武士の時代の終わりを納得しつつ、好むと好まざるに関わらず誰もが新しい時代に身を投じていた頃のこと。

長い木が入る。

舞台上に明かりがつく。

入り口に笠を目深にかぶった男、石田。傘に丸の印が入った薬箱を背負っている。見るからに不審な動きをしているが身のこなしは軽い。寝ている登を見てにやりとている。奥から人の気配を感じそそくさと隠れ去る。

登の妻、ヨネ。人の気配がした気がしてやってきたのだが誰もいない。妙なところを探したりしているのは良く言えば大らかな彼女の性格ゆえだが、悪く言えば何処か抜けている。ようやくいつもの勘違いと思い直した頃に足元に亭主が転がっていることに気づく。

ヨネ　あら。あらあらあらあら、あら。あらま。ちょっと、あなた、こんな所で寝てしまったら風邪をひきますよ。あなた、あなたってば。　…あなた。やっぱりこのあなたっていう響きは良いわね。人の妻になったっていう気がするわ。もっと言っちゃいましょ、ねえ、あなた、あなた。

全く起きない登、なんだかムゴムゴと脈絡の無い寝言を言う。

ヨネ　あなた、起きて、ねえ、あなた、あなた。ちょっともう誰か聞いててくれないかしら、あなた、あなた～。

ブインブイン揺するが全く起きない登。
怪しげな雰囲気でこっそり覗いていた怪しげな薬屋が一旦隠れる。

ヨネ　今日は登一郎さんがいらっしゃるんでしょ。二十年ぶりに会うんでしょ。起きなくてよろしいのですか。

起きない。

ヨネ　…なるほど。わかりました。どうしても起きないのでしたら私にも妻としての意地があります。妻として、あなたに風邪をひかせるわけにはまいりません妻として。あなたには妻として本格的に寝ていただくことにします！　妻として。うふ、妻としてですって。ちょっと待ってて下さいね、お布団を持ってきますからね～。

ヨネが嬉しそうにいそいそと隣の部屋へ。
石田が入ってくる。

石田　ごめん下さいまし。ごめん下さいまし。

奥から「あ〜い〜」という声が聞こえる。
バタバタと布団を抱えながらやってくるヨネ。

ヨネ　はい。
石田　どうも。
ヨネ　…登一郎さん？
石田　は？
ヨネ　ではなさそうね。
石田　はぁ。
ヨネ　どちらさまでしょ？
石田　あ、はい、わたくし、あの…
ヨネ　あらいけない、お布団持ちながらなんて、失礼ですよね。ごめんあそばせ、おほほ。

布団をザンと登の顔面へ置く。

ヨネ　それで、どちらさまでしょ？
石田　あ、わたくし薬の石田と申しまして。
ヨネ　あら薬屋さんでしたの。
石田　はい。
ヨネ　この辺りのかたではありませんよねぇ。
石田　はい、わたくし、あの…
ヨネ　あ！　富山のかたですね？　富山の薬売り。
石田　いえ、わたくし、あの…
ヨネ　実家にいた頃にもお世話になってましたから富山の薬売りさんには。
石田　ですからわたくし、あの…
ヨネ　たーいへんですよねぇ富山から浜松までいらっしゃるなんて。（身振りで）富山がこのあたりで浜松がこのあたりだからここからこうでしょう？　私なんてとてもとても、行けたとしてもここからこれくらいまでかしらね。ねえ、そう思いません？
石田　いや、わたくしあの…
ヨネ　となるとここはどこにあたるのかしら？　…四国？　良いわよね、私なんて生まれてこのかた浜松から出たことがありませんもの。
石田　はぁ。それで、わたくし、あの…
ヨネ　あ、実家はすぐ近所なんですよ、肴町の。魚屋なんです。こう見えても若い頃は肴町小町なんて言われたものなんですよ。言いにくいわよねサカナマチコマチ。

石田　サカナマチコマチ。
ヨネ　サカナマチコマチ。
石田　サカナマチコマチ。
ヨネ　はいよくできました。あ、今は妹のヨシが二代目肴町小町って呼ばれてるんです。
石田　はぁ。で、わたくし、あの…
ヨネ　やぁだもう美人姉妹だなんて！　そんなに言ってもなんにも出ませんよ。あ、お薬でしたね、今お代持ってきますからね。ちょっと待ってて下さいね。

ヨネが奥へ行く。

石田　…凄いな。「わたくし、あの」しか言わせてもらえなかった。

登を見つめる石田。

石田　中島君、良い奥さんをもらったな。

登は眠っている。

石田　おい、そこのお前、それからそっちの。どういうつもりか知らないが妙な気は起こさん方が身のためだぞ。

石田がいなくなる。
ヨネが財布を持って戻ってくる。

ヨネ　お待たせいたしました～ってあら？

またまた奇妙なところを探すヨネ。

ヨネ　変ね。…最初からいなかったのかしらね、うん。

ヨシがやってくる。

ヨシ　お姉ちゃん。
ヨネ　あらヨシちゃん、いらっしゃい。あ、ねえヨシちゃん、その辺で富山の薬売りさん見なかった？
ヨシ　富山の薬売り？

ヨネ　そう。
ヨシ　わからないわ、どんな感じの人？
ヨネ　あのねえ富山の薬売なの。

上手にはけて団子をくわえて出てくるヨシ。

ヨシ　うん、だからそれを具体的に聞いてるんだけど、何か特徴とかないの？
ヨネ　特徴特徴、あ、そうそう大きな箱を担いでたわ。
ヨシ　う～ん、それだけじゃあねぇ。
ヨネ　そんな人いくらでもいるものねぇ。ま、いいわ。またの機会にしましょ。それで、今日はどうしたの？
ヨシ　新婚夫婦の睦まじい仲を妨害しにきたに決まってるじゃないの。
ヨネ　やん、もう仲睦まじいだなんて。
ヨシ　（登の寝姿を見て）あれ？　お義兄さん死んじゃったの？　ちょっと姉さん、幾ら急に死んじゃったからってもう少し手ごろな布きれはなかったの？
ヨネ　え？　あら、いけない。

布団をよける。
登のいびきがまた聞こえる。

ヨシ　あら、まだ生きてるわ。
ヨネ　危なかったわ。死は日常に潜んでるものなのね、一つ学んだわ。
ヨシ　ふむ、この様子だとまだ来てないみたいね。
ヨネ　え？
ヨシ　お義兄さんの息子さんよ、登一郎さんだっけ？　今日なんでしょ、来るの。
ヨネ　うん。
ヨシ　どんな人なんだろうね～。
ヨネ　どんな人なのかしらねぇ。
ヨシ　お義兄さんから聞いてないの？
ヨネ　この人だって知らないのよ、ほんの子供の頃に別れたっきりなんだから。
ヨシ　そうよねぇ。
ヨネ　そうよ。
ヨシ　ね、お姉ちゃんはどんな気分なの？
ヨネ　どんな気分って？
ヨシ　新婚早々前の奥さんとの子供をひきとるなんて。
ヨネ　そりゃあ、ねぇ。

ヨシ　複雑な気分？
ヨネ　…そうね、でもそんなことは思ってもいけないの。かわいそうな人なのよ登一郎さんは。生まれて間もなくこの人とは別れることになって、その上お母様とも離れて暮らさなくてはならなくて。
ヨシ　親戚の家に預けられてたんだっけ。
ヨネ　そう。
ヨシ　肩身も狭かったでしょうね。
ヨネ　かもしれないわね。
ヨシ　親の愛情を受けずに育ったってことか…それってどんな気分なんだろうね。
ヨネ　わからないわ。でもね、ようやく親子一緒に暮らせるんですもの、うちでは気楽にのんびりと過ごしてもらいたいじゃない。
ヨシ　それは、母としてそう思うの？
ヨネ　そんな大それたことは考えてないわ。すぐに母親になれるだなんて、そんなおこがましいこと。年だって私とそんなに変わらないんだし。
ヨシ　そうよね。
ヨネ　そうよ。

登は寝ている。

ヨシ　しっかしこの顔見てると信じられないわね。
ヨネ　何が？
ヨシ　この人が人を殺したことがある…
ヨネ　ヨシちゃん！
ヨシ　…びっくりしたぁ。
ヨネ　ヨシちゃん、約束したでしょう？　そのことは滅多なことがない限り口にしてはいけないって。
ヨシ　ごめん、誰もいないから良いかなって。ごめんね。
ヨネ　ううん、私こそ大きな声出しちゃってごめんね。
ヨシ　ううん。

登は寝ている。

ヨシ　（登の描いている絵を見て）これ、お義兄さんの？
ヨネ　うん。それだけはどんなに忙しくても続けてるわ。
ヨシ　そっか。
ヨネ　ええ。

登は寝ている。

ヨシ　さてと。
ヨネ　行くの？
ヨシ　うん、お姉ちゃんもね。
ヨネ　私も？
ヨシ　新しい甘味屋さんが出来たのよ、一緒にいこ。
ヨネ　あなたお店ぬけて来たんじゃないの？
ヨシ　大丈夫よ、おとっつぁんだっているんだから。
ヨネ　でも登一郎さんだっていつ来るかわからないし。
ヨシ　大丈夫よ、すぐ近所だから。ちょっと行ってパクパクパクって食べちゃえば良いんだから。
ヨネ　でも。
ヨシ　食べたいの食べたくないの？
ヨネ　そりゃ食べたいわ。
ヨシ　じゃ、いこ。
ヨネ　…そうね。

二人、立ち上がる。

ヨシ　今日はお姉ちゃんのおごりね。
ヨネ　あなたねぇ、うちは貧乏道場のやりくりでただでさえ火の車なのに…
ヨシ　お姉ちゃん、最近また綺麗になったんじゃない？　愛されてるのねぇ。
ヨネ　好きなだけお食べなさい！　お腹がはち切れるまで！

二人がいなくなる。

登の夢の中へ。

いつのまにか洋装の男が立っている。
蝦夷共和国陸軍奉行並、新撰組鬼の副長　土方歳三。

土方　中島君。

登は眠っている。

土方　中島君。

登は眠っている。

土方　新撰組伍長中島登！

登　（飛び起きて）はい。はい。駄目です、それは内緒なんです、私が新撰組にいたことは妻にも誰にも言ってないんです。

土方　中島君。

登　はい、はい、起きてます。眠ってません寝てません、生まれて一度も寝たことありません。

土方　（笑）

登　あ、土方さんでしたか。

土方　他の隊士が言っていたぞ、中島は戦の前でも所構わずぐーすか寝ると。

登　誰ですか、そんなテキトーな噂を流してるのは。

土方　安富だろ、それから、島田、相馬も言ってたな、それから…

登　ああ、もう良いです。だいたいみんなってことですね。

土方　ああ。豪胆だな。

登　いえ、それは逆です。

土方　逆？

登　はい、戦や大事な出来事の前になると考え過ぎてしまって駄目なんです。

土方　だから寝ると？

登　はい、とりあえず、寝ます。目が覚めたら大事なことはそれこそ目の前にあります。あとはやるだけです。

土方　ふん、君は面白い。

登　はぁ。それで、方針は決まりましたか？

土方　ああ、徹底抗戦ということでまとまった。

登　…そうですか。

土方　…中島君。

登　はい。

土方　この戦、負けるな。

登　…。

土方　箱館は落ちるよ。

登　…。

土方　…降伏するなら今かと思ったんだがな。

登　？

土方　そうそう、榎本君、あの男はやはり変わってるな。徹底抗戦と決まるやいなや何

をしたと思う？
登　さあ？
土方　万国海律全書なるオランダの本を敵の参謀である黒田清隆に送ったそうだよ。
登　なんでまたそのようなことを？
土方　うん、なんでもその本は貴重なものらしくてな。これからの国づくりには欠かせぬものであるから一番安全な場所に送ったそうだ。
登　一番安全な場所が敵の親玉の懐ですか、負けを認めたようなものですね。
土方　ああ、だが面白い。
登　そうでしょうか？
土方　ああ。
登　はぁ。
土方　ああいう男は死なせちゃいかんよ。
登　…。
土方　これからの世の中に必要なのはああいう男だ。
登　…ここを死に場所と決めますか、土方さん。
土方　ああ、俺はな。
登　お供しますよ。
土方　…中島君。
登　はい。
土方　君を連れていくわけにはいかない。
登　なぜですか、僕も土方さんと一緒に死にます！
土方　ぐにゃん？
登　ぐにゃん？　土方さん、ぐにゃんってなんですか？
土方　…中島君、君わぁわぁわぁ。
登　は？
土方　君はここにいぃぃぃぅぅ！（なんだか声の調律がおかしい）
登　え？　土方さん、どうしたんですか？
土方　（なんだか妙な言葉にならない言葉）
登　え？　なにこれ？　土方さんが狂った？　え？
土方　（妙な言葉、というより音）
登　土方さん！　しっかりして下さい！　土方さん！
土方　さぁぁぁらぁぁばぁぁだ～～～～。

土方、去る。

登　ちょ、土方さん！　待って下さい！　私も行きます！　連れて行って下さい！

なんだかうまく歩けない登。

登　なんだこれ！　足が、うまく、歩けない！　土方さん！　待って下さい！　そんな土方さんでもついて行きます！　畜生足が！　なにこれ夢？

ようやく竹刀を掴む。

登　土方さん！

夢から覚める。

登　…夢か。

青年が一人立ち尽くしている。
互いに顔を見合わせ驚く。

登　…あ。
登一郎　…あ。

妙な時間が流れる。

登　…登一郎、君か？
登一郎　…父上、殿ですか？

なんとなく安堵の空気が流れる。

登一郎　あ、あの、初めまして…ではないのですが、改めまして父上殿、登一郎です。
登　中島、登です。

妙な沈黙。

登　…あ、いやいや、いやいやいや、堅い挨拶は抜きにしよう、な。なんというかこう、もっとざっくばらんに行こう、親子なわけだし一応。
登一郎　…。
登　…なんて私が言えた義理じゃないか。すまん。
登一郎　いえ。

登　…。
登一郎　…。
登　まずは上がらないかね？
登一郎　…。
登　ほら、今日からは君の家でもあるんだし、遠慮なく、ね。
登一郎　…はい。

登一郎が履物を脱いでいるとヨシとヨネが帰ってくる。

ヨシ　（楊枝をくわえながら）羊羹はイマイチだったわねぇ。
ヨネ　あら、でもわらび餅とみたらしは美味しかったわ。
ヨシ　あと羽二重とういろうもね。
ヨネ　そうそう、でもきんつばと最中とあんころ餅は…
ヨシ　様子見ね、職人さんがまだ若いから、もう少し長い目でつきあってあげましょ。
ヨネ　そうね、（何かを思い出し）あら、いけない。
ヨシ　どうしたのお姉ちゃん。
ヨネ　シメにお汁粉頂くの忘れちゃった。
ヨシ　あら、そう言えば。
ヨネ　…。
ヨシ　…。
ヨネ　戻りましょう。
ヨシ　そうね。…あれ？　ちょっと姉さん、あれひょっとして。
ヨネ　（既に甘味屋に向かおうとしている）なに？　ずんだ餅？
ヨシ　ずんだ餅じゃないわ、お姉ちゃん。あれってひょっとして登一郎さんじゃない？
ヨネ　ええ？　（玄関の方を見る）あら、きっとそうだわ、どうしましょ。
ヨシ　なんだか思ってたよりは二枚目ね、義兄さんの息子だって言うからあんまり期待はしてなかったんだけど。
ヨネ　ちょっとヨシちゃん、それってどういう…
ヨシ　はいはい怒るのは後で出来るんだから、まずは御挨拶しないと。
ヨネ　…そうね、そうよね。
ヨシ　複雑な環境で育ってるんだから難しい人かもしれないわ。最初が肝心よ、お姉ちゃん。
ヨネ　わかってるわ。（体が行こうとしない）
ヨシ　ちょっとお姉ちゃん、なんだか腰がひけてるわよ。
ヨネ　ヨシちゃん。
ヨシ　なあに？

ヨネ　なんて声かけましょう。
ヨシ　え、お姉ちゃん、ひょっとして緊張してる？
ヨネ　してないって言いたいけど全力でしてるわね。
ヨシ　もう、自然体よ自然体、いつも通りのお姉ちゃんで大丈夫よ。
ヨネ　そう？　そうかしら？
ヨシ　うん、大丈夫。
ヨネ　そう、そうよね。いつも通りの私で。
ヨシ　そうよ、頑張って。
ヨネ　いつも通りの私、いつも通りの私、自然体、自然体。（玄関に近づいていく）
登　君は脱ぐのに随分時間がかかるねぇ（二人に気がつき）おお。
ヨシ　お義兄さん、ただいま。
登　ああ。登一郎君、紹介しよう、これがうちの…
ヨネ　今日から私があなたのお母さんよ！　さあ！　この胸でたんとお泣きなさい！

沈黙

登一郎　…はぁ。
登　これがうちの家内のヨネ。
ヨネ　どうも。
登　彼女は妻の妹のおヨシちゃん。
登一郎　好きだ！

蚊が気になって聞いてなかったヨシ。

ヨシ　？
登　とりあえず飯にしようか。ヨネ、登一郎君を部屋に案内してあげて。ヨシちゃんも食べてくかい？
ヨシ　そうね、小腹もすいてきたし。
ヨネ　（両手を大きく広げたまま固まっていたが）小腹？　まだ入るのあなた？
ヨシ　確かお団子がまだあったわよね～。
登一郎　好きだ！

蚊がいて聞いてないヨシ。

ヨネ　ねえ、あなたまだ入るの？
ヨシ　お部屋はこっちで～す。

登一郎　好きだ！

ヨシが登一郎を案内して奥に消える。

ヨネ　ちょっと、ヨシちゃん、あなたの小腹ってどうなってるの？

追いかけるようにヨネも奥に消える。

三人を見送るように見ている登。
いつのまにか夕暮れが近づいている。
遠くに鐘の音が聞こえる。

登　（行きかけて）ああ、どなたかは存じませんが、あなたがたももう遅いですから、お帰りになった方が良いですよ。それじゃ。

登も奥へ消える。

鐘の音が聞こえる。
あらぬ所に隠れていた二人が唐突に姿を現す。

二人とも随分みすぼらしい服装。ほっかむりなどしている。

逃げるようにいなくなる。

石灯籠に明かりがともる。

男が二人。

内山　あいつら遅いのぉ。
甘利　…。
内山　ひょっとして捕まったんと違うか。
甘利　…。
内山　相手は腐っても新撰組やしのぉ。
甘利　…。
内山　（灯篭に向かって）のう甘利、われもそう思わんか？　なんや、われ、緊張しとんのかい？　石みたいに硬うなって、おうおうおう（灯篭に絡む）。

甘利　は？
内山　ん？　ん？　ん？　おお、甘利はそっちやったか。
甘利　あ？
内山　いや、幾ら話しかけても返事せんかったから貴様と石灯籠の見分けがつかんくなっとった。
甘利　ふん。
内山　…。
甘利　…。
内山　おうおう甘利、こっとるのぉ！　まるで石みたいにカチンコチンコやないかー い！　ちょいとほぐしたろ、うりゃうりゃ！（灯篭に絡む）
甘利　…うるさい。
内山　…。
甘利　ったく。
内山　甘利、気づかんか？
甘利　何が。
内山　ここに一人のさみしんぼう（さみしんぼうのポーズ）
甘利　は？
内山　話しかけても話しかけても全く返事をしてもらえない、僕は一人のさみしんぼう（さみしんぼうのポーズ）。
甘利　なんだそれは。
内山　ほら、内山だよ。ここに君の同士である内山孝介がここにおるよ。（自由ネタ）でもその内山孝介というのは世を忍ぶ仮の姿でその正体はおひげの生えてるさびしんぼう（さびしんぼうのポーズ）
甘利　…。
内山　かまえや！
甘利　なんだお前は？　かまってほしいのか？
内山　だからそう言うとるやろこのボケ。
甘利　（内山にぬいっと近づき）
内山　な、なんや急に。
甘利　貴様と俺は同じ目的を持った同志だが馴れ合うつもりは無い、以上だ。（元の姿勢に戻る）
内山　…今に見とけよこのボケカス。いつか、いつかお前を最高の笑顔にさしたるからなあ！　溢れんばかりの微笑みをその顔にたたえさせてやるからなあ！　首洗って待っとけ！
甘利　（無視）

登の家に忍び込んでいた二人（有栖川鶴太郎・亀吉）がやってくる。

内山　おお、鶴、亀、無事やったか。
鶴太郎　へい。
亀吉　内山殿、なんですか？　恋物語でも語り合っておったのですか？
内山　なんでやねん、ちゃうわボケ。
亀吉　だって今、最高の笑顔にさしたるとか…
内山　ええねんそれわ。個人的な思いや。
亀吉　個人的な思い、やはり恋ですね。
内山　ちゃうっちゅーねん。ったく。それにしてもお前ら随分遅かったな。見つかったりせんかったろうな？

鶴太郎と亀吉、顔を見合わせ。

鶴・亀　「実は」「気づかれてません」
内山　？
鶴・亀　「本当のことを言うと」「全然大丈夫です」
内山　ん？　ん？　どっち？
鶴・亀　「？？？（御自由に）」（だるまさんが・転んだ　ぼんさんが・屁をこいた）等々。
内山　なんやねんそれ。
鶴太郎　本当に気づかれてません！　中島登にも妙な薬屋にも！
内山　…ホンマか？
鶴太郎　いえ、有栖川です。
内山　え？
鶴太郎　有栖川です。
内山　いや、俺はお前らホンマかって…
鶴太郎　ですから有栖川です。
内山　いや、今のはお前らが本間さんかどうかと聞いたわけではなく…
鶴太郎　有栖川です！　うちは先祖代々有栖川です！
内山　お、おう、まあええわ、して、首尾は？
亀吉　これに（紙を渡す）
内山　どれどれ、んー、字が汚い、びっくりするぅ。
鶴太郎　すいません。
内山　いや、まあ字が書けるだけでも大したもんや。なになに、んーと。
甘利　結論から聞かせてもらえるか？
鶴太郎　は。新撰組伍長、中島登に間違いありません！

甘利　…そうか。
内山　中島登、天保九年、武州多摩郡の農家の長男として生まれる。
甘利　？
内山　おう、これにな（紙をひらひらさせ）。
内山　安政九年、天然理心流に入門。翌年安藤マスと結婚、長男登一郎をもうける。後に八王子千人同心に所属したが…仲間の一人を斬殺、逃亡生活に入る。妻とは離婚。逃亡中は博徒として生活？　なんや、ばくち打ちやったんかい。明治二年、函館五稜郭で降伏し謹慎処分。ん？　これだと新撰組にいつ入隊したのかわからんな。
亀吉　申し訳ありません！　それだけは詳しくわかりませんでした。が、慶応四年の鳥羽伏見の戦いの頃には新撰組に入隊していたと思われます。
内山　んー、ほうか。それから…明治三年静岡藩お預けになり、同年に赦免される。一度武州多摩に戻るも若い頃の殺人事件の影響か地元に居場所なく浜松に移る。ついぃ先日、魚屋沢木半平の長女ヨネと再婚、先妻との間に出来た長男登一郎を呼び寄せ同居する模様、現在は剣術道場をひらいて生計をたてている。近所での評判も良く、親切な登さんで通っている。ちなみに新選組隊士であったことは家族にも隠して暮らしている、と。よくここまで調べたな、流石や。
鶴太郎　は、ありがとうございます。
内山　ただ全部ひらがなってのは流石に辛いな、今度時間ある時に漢字教えたるわ。
亀吉　あ、ありがとうございます！
鶴太郎　（手を出している）
内山　ん？　おうそうか、そういう約束やったもんな。甘利。
甘利　（甘利が銭の入った袋を渡す）これからも色々頼むことになると思うが、よろしくな。
鶴太郎　へい、銭さえもらえればなんでもやります。
甘利　ありがとう。
鶴太郎　でわ。

有栖川兄弟、いなくなる。

内山　（二人の去って行った方を見つめながら）有栖川鶴太郎、亀吉。
甘利　ん？
内山　凄い苗字やの、有栖川。有栖川の宮様と何か関係があるんかいの？
甘利　無いだろ。
内山　せやな。
甘利　何年か前にあっただろ、平民苗字必称義務令ってのが。あの時に付けたんだろ？
内山　ああ。せやけど有栖川て。

甘利　かまわんだろ、今は四民平等の世の中なんだろ？　だったら平民が宮様を名乗ったって良いだろ。だいたい迷惑な話なんだ、平民って言ったって代々苗字は持ってたんだ。それを徳川幕府が公式に使うことを禁止した、武士との差別をはかるためさ。２６０年という歴史の中で平民の中には自分の苗字を忘れてしまった連中だっていたんだ。それが、幕府が倒れ明治の世の中になって急に苗字を名乗れと言われた。じゃあ苗字を忘れてしまった連中はどうする？　そりゃ聞いたことのある苗字を名乗ってしまうことだってあるだろ？　有栖川って名乗るなんてこともあるさ。

内山　…。

甘利　…なんだよ。

内山　…。

甘利　だからなんだって聞いてんだよ。（石灯籠に）聞いてますか～聞いてますか～僕の話を聞いてますか～。

内山　…いや、急によく喋ったなと思って。

甘利　…。

内山　随分と平民の事情に詳しい御様子で。

甘利　…俺も元は農民の出だ。

内山　ん？　お前は八王子千人同心の出やろ？　同心っちゅうくらいなんやから侍やったんちゃうんかい？

甘利　農民だよ。同心であるっていう名誉だけ与えられてたんだ。実際、俺たちはに苗字を名乗ることも許されていなかった。

内山　…そうか。

甘利　幻滅したか？

内山　いや、我らは新撰組に恨みを持つもの同士、身分など関係ない。

甘利　…そうか。

内山　で、どうする？　この案件は貴様の案件や。やりたいようにやればいい、俺はそれに従う。

甘利　…うん。

内山　父親の敵なんやろ？

甘利　…ああ。

内山　一家皆殺しにするか。

甘利　…ぬるいよ。

内山　あん？

甘利　皆殺しくらいじゃ、ぬるい。ただ殺すだけだったらいつでも殺せる。奴にはそれ以上の苦しみ味わってもらって、それから死んでもらう。

内山　…ほぅ。

甘利　まずは兵糧攻めだ。

内山　兵糧攻め？
甘利　奴は剣術道場をひらいてると言ってたな。
内山　おお、報告にそう書いてあるのぉ。
甘利　俺に考えがある。相談がてら夜鷹そばでも食いに行こう。
内山　おう、ん？　夜鷹そば？
甘利　おう。
内山　おま、こういう時はおうどんやろ、夜泣きうどん。
甘利　はあ？
内山　あん？
甘利　何がおうどんだ、おうどんって顔か、うどんって言え、まあ食わないけどなぁうどんなんて。
内山　おいお前、俺のことはなんぼ言ってもかめへんけどおうどんのこと悪く言うたら承知せぇへんぞ。
甘利　俺は江戸の生まれでな、こういうときはそばって決まってんだ。
内山　おあいにくやのぉ、俺は見ての通りの大坂もんや、産湯がわりにおうどんに浸かって生まれてきとんねん、そばなんてよう食わへん。

互いに刀に手をかける。

内山　あんさんとは全くと言っていいほど気があいまへんなぁ。
甘利　奇遇だな、俺も今全く同じことを考えていた。

石田が通りかかる。「薬～薬」等々デタラメな文句を言っている。
互いに刀を隠す。
石田が通り過ぎる。

内山　廃刀令以降、喧嘩もやりにくくなったのう。
甘利　…この喧嘩、俺の勝ちだな。
内山　なんでやねん。

甘利が懐から短銃を出す。

内山　ほ～。なら引き分けや。

内山も懐から短銃。

甘利　ふん。
内山　ふっ。
甘利　うどんみたいな顔しやがって、行くぞ。（行く）
内山　なんやねんそれ、どういうことや、おい、待て、どのへんがうどんやねん。場合によっては深く傷つくぞこら。おい、待て！

二人がいなくなる。

別の場所に有栖川兄弟がウキウキしながら現れる。

亀吉　兄ちゃん、鶴太郎兄ちゃん、早く見ようよ。
鶴太郎　おう（辺りを警戒しつつ甘利からもらった銭を確認する）。
亀吉　こ、こんなに？
鶴太郎　凄いな。
亀吉　ねえ、兄ちゃん、凄いね、これ凄いね、大金だね。
鶴太郎　ああ。
亀吉　これでおとっつぁんやおかっつぁんにもたらふく食わせてやれるね？
鶴太郎　ああ、ああ。
亀吉　よし、兄ちゃん、帰ろう？　家に帰ろう。
鶴太郎　いや、まだだ。
亀吉　なんで？
鶴太郎　あの人たちについて行けばまだまだ稼げる。
亀吉　それは、そうかもしれないけど、あの人たちは士族だよ、悪い人たちじゃなさそうだけどさぁ、そのうち危ないことにまきこまれるような気がしてならねんだよ。
鶴太郎　じゃあこれ持ってお前だけ帰れ。
亀吉　え？
鶴太郎　兄ちゃんはあの人たちについて行くから。
亀吉　ええ？
鶴太郎　いいか亀吉、これからの世の中は銭を持ってる奴の勝ちだ。
亀吉　うん。
鶴太郎　今は四民平等の世の中だ、これからの世の中でのし上がっていく為に必要なものはたった一つだけだ！
亀吉　うん！
鶴太郎　それは銭と
亀吉　と？
鶴太郎　家族を思う心だ。

亀吉　大事だ、それは一番大事だ。
鶴太郎　でもな、思うだけでは家族は幸せにはなれない、わかるな？
亀吉　うん。
鶴太郎　家族みんなが幸せになるために必要なものが三つある。
亀吉　それは？
鶴太郎　愛だけだ！
亀吉　兄ちゃん！　なんかよくわかんないけどオイラ感動したよ、オイラも兄ちゃんについて行くよ。
鶴太郎　そうか。亀吉、ここからは真面目な話だ。
亀吉　え？
鶴太郎　四民平等になって、表向きにはおらたちみたいな身分の低いもんへの差別はなくなった…ってことになってる。でもな、それは嘘だかんな。差別は絶対になくならねぇ。
亀吉　うん。
鶴太郎　その上、ずるがしこい奴らはおらたちが持ってた権利まで持ってっちまった、わかるな？
亀吉　おっとう達のことだね？
鶴太郎　そうだ。徳川さんの時代にゃおらたちみたいな職業を蔑んでたくせに、いざ武士って身分がなくなると食い扶持がなくなるって慌てくさって、しまいにゃおっとう達騙して仕事まで奪っちまいやがって。オラたちみてえな身分じゃ、他に仕事も見つからねえし。
亀吉　（悔しくて泣いている）
鶴太郎　だから俺は誓ったんだ。天皇様にはなれねえけど、せめて宮様くらいの人間になっていつかあいつら見返してやるんだって！
亀吉　それで有栖川って苗字にしたんだね兄ちゃん！
鶴太郎　おうよ！　だから今は甘利殿や内山殿について行って銭を稼ぐだ！　その稼いだ銭で商売初めて、大金持ちになってやるんだ！
亀吉　兄ちゃんかっこいい！　…でも。
鶴太郎　でも？　亀吉、でもなんだよ。
亀吉　あの中島登って人、あんまり悪そうな人に見えなかったけどな、勘は鋭ぇみたいだったけど。
鶴太郎　あー。
亀吉　甘利様はあの人に復讐するつもりなんだろ？　もしかしたら殺したりするんじゃ…
鶴太郎　亀、俺も詳しいことは知らねえし、あの中島っておっさんにも個人的には恨みもねぇ。でもな、これは内山殿が言ってたことなんだが、どうやら甘利殿は父上をあ

の中島登ってのに殺されてるらしいんだ。
亀吉　父上？　おっとうをか？
鶴太郎　ああ。
亀吉　極悪人でねえか。
鶴太郎　そんだ。
亀吉　甘利様はおっとうの敵をうとうってんだな？　仇討だ、名誉なことでねーか。
鶴太郎　ああ、でもな、明治になって、お前がまだちっさい頃だな、敵討禁止令って法律が出来てな仇討はしてはいけねえことになったんだ。
亀吉　へー。
鶴太郎　だから甘利殿も流石に殺すとこまでは考えてねえとは思う。
亀吉　うん。
鶴太郎　わかんねえけどな。まあ、ともかくだ、今おらたちがやるべきことは銭を稼ぐことだ。そのためには甘利殿や内山殿のお役に立たねばならんちゅうことだ。
亀吉　うん、うん、そだね。おう（腹が鳴る）
鶴太郎　どした？
亀吉　兄ちゃん、腹が、減った。
鶴太郎　言われてみれば、おう（腹が鳴る）なあ亀よ。
亀吉　なあに？　鶴兄ちゃん。
鶴太郎　…蕎麦、食いに行こうか。
亀吉　蕎麦。
鶴太郎　た、たまごも、付けちゃおっかなぁ。
亀吉　た、たまご、いいの？
鶴太郎　今日だけだぞ、今日だけ、な？
亀吉　（黙ってうなづく）
鶴太郎　じゃ、行くか？
亀吉　（黙ってうなづく）

興奮のあまり足がもつれて上手く歩けないまま二人、いなくなる。

音楽。

暗転。

日付が変わっている。

ヨネとヨシが薬屋の石田と話している。

石田　ですから打ち身ですとか捻挫ですとか、それから切り傷なんかにも効きます。
ヨネ　あらまぁ。
石田　それから骨折した時なんかもね、この石田散薬を飲めば早く治ると言われていますよ。
ヨシ　姉さん、丁度良いんじゃないこれ。
石田　丁度良いと言いますと？
ヨネ　いえね、うちの主人が剣術道場をやっておりまして。
ヨシ　これがまた怪我がたえなくてね。
石田　御主人がですか？
ヨネ　いえ、主人は全然、怪我の一つもしたことないのですけれど、門下生の方々がねぇ。
石田　はは、天然理心流は荒っぽい稽古をしますからねぇ。

ヨネとヨシが怪訝な顔をする。

石田　あ、あれですよね？　そこの角を左に三つまがったところにある道場ですよね？　あ、三つ曲がったらここに戻ってきちゃうか、ははは。そうそう、この御近所で薬を売ってた時に聞いたんだったかな、天然理心流の道場があるって。
ヨネ　そうなんです、少しは手加減なさったらって言うんですけど、「これでも手加減してる～」って。
石田　剣術の稽古であんまり手加減してしまっては上達しませんからねえ。そこでこの石田散薬の出番なわけです。怪我をしてもすぐに治るからすぐまた稽古に打ち込めてみるみる上達。
ヨネ　あらお上手。じゃあ頂こうかしらね。これは飲み薬なのよね？
石田　はい。あ、ですが飲み方に少し特徴がございまして、水ではなくお酒と一緒にお飲み下さい。
ヨネ　お酒と一緒に？　変わってるわねぇ。
石田　はい、それも熱燗にしていただいて飲むとより効果があります。
ヨシ　（にやにやしながら）薬屋さん。
石田　はい、なんでしょう？
ヨシ　このお薬、あっちの方には効果は無いのかしら？
石田　あっち、ですか？

ヨシ　そ、あっち。
石田　あっちって…どっちですか？
ヨシ　どっちって、あっちはあっちよ。
石田　こっちですか？
ヨネ　そっちじゃないかしら？
ヨシ　違う！　こっちでもそっちでもどっちでもない！
ヨネ　あ、じゃあこっちね。
石田　じゃあそっち行きましょうか。
ヨネ　そうね。

二人で場所を移動しようとする。

ヨシ　どっちでもない！　二人ともとんでもない朴念仁ね。良い？　お姉ちゃんは新婚さんでしょ？
ヨネ　そうよ。
ヨシ　義兄さんだってそんなに若くはないんだし。
ヨネ　そうねぇ。
ヨシ　ってことはね、ほら、やっぱり早くにねえほら（身振りで妊娠を表現する）。
ヨネ　ああ、ああ、もうやだヨシちゃんたら！　それを私に言わせる気？
ヨシ　大事なことじゃない。ほら、聞きなさいよ。
ヨネ　…そうねぇ。あの、薬屋さん。女の私がこんなことを聞くのもちょっとはしたないかもしれないんですけど…その…このお薬…お通じにも効きまして！

全員ずっこける。隠れていた有栖川兄弟も飛び出してくる。が、すぐ隠れる。

ヨシ　この話の流れでなんでお通じの話になるのよ！
ヨネ　違うの？
石田　あの、流石の私でも気づきました。石田散薬は万能薬ですのでそっちの方にも効果があるかと思われます。
ヨシ　良かったね、お姉ちゃん。
ヨネ　良かった、の？
ヨシ　そうよ。ほら、お代をお支払いしなきゃ。
ヨネ　（釈然としないが）ふ～ん、あ、そう。財布を取ってきますね、あっちに。

ヨネが奥の部屋に消える。

ヨシ　あれでよく結婚できたわよねぇ。
石田　（微笑んでいる）
ヨシ　でも、お似合いなのよねぇ、お姉ちゃんとお義兄さん。
石田　ヨシさん、でしたよね？　いらっしゃらないんですか、良い人は？
ヨシ　私？　私は駄目よ、こんなガラッパチだもの、嫁にもらってくれる人なんていやしません。
石田　そんなことはないでしょう。
ヨシ　そうなのよ。
石田　…縁なんてものは案外身近なところに転がってるものですよ。
ヨシ　そういうもんかしらねぇ。
石田　ええ。
ヨシ　ま、今は色気より食い気よね。
石田　（登の描いた絵を見て）これは？
ヨシ　ああ、義兄さんが描いてる絵よ。なんだかね、暇をみつけては描いてるみたい。
石田　…。
ヨシ　昔のお友達の似顔絵らしいんだけどね。
石田　（震えている）
ヨシ　…薬屋さん？
石田　いえ、なんでも…（ごまかしがてらにもう一枚見る）…山口二郎、享年二十七才。
ヨシ　え？
石田　あ、いや（登の気配にビクンと反応する）。
ヨシ　どしたの急に？
石田　それでは私はこれで。
ヨシ　え、ちょっと。

ヨネが財布を持ってやってくる。

ヨネ　あら薬屋さん、お帰り？
石田　はい。
ヨネ　ちょっと待って下さいね、今お代を払いますからね。
石田　いえ、後日。

石田が機敏に消える。

ヨネ　あら、お気をつけて～。
ヨシ　変な薬屋さんね。

ヨネ　何が？
ヨシ　え？
ヨネ　どこが？
ヨシ　似たようなもんだもんねぇ。
ヨネ　？

道場帰りの登と登一郎がやってくる。

登一郎　驚きました、あんなにたくさん門下生がいるとは。流石浜松は徳川様のおひざ元、今でも剣術が盛んなのですね。
登　いや、あれでもね、少し少なくなった方なんだよ。
登一郎　そうなんですか？
登　ほら、先年、西南戦争があっただろ？　あれ以降は少しずつ減ってきてはいるんだ。
登一郎　そうなんですか。
登　時代の流れかねぇ。いやいや、しかし登一郎君はなかなか筋が良いね。
登一郎　そうでしょうか。
登　しかしどこの流儀かな？　天然理心流ではないようだが。
登一郎　…色々な流派を転々と。本当は天然理心流を学びたかったのですが…
登　…そうか、私のせいだね。
登一郎　…。
登　私が地元であんな事件を起こしてしまったからな。
登一郎　…。
登　人殺しの息子だなんだと言われたんだろうね。
登一郎　…。
登　辛い思いをさせたね。本当にすまないことをした（頭を下げる）。
登一郎　あ、いえ、父上殿、頭をあげて下さい。
登　…。
登一郎　…本当は少し安心してるんです。
登　安心？
登一郎　父上殿から手紙が届いたとき、正直何を今更とも思いました。人を殺し、僕を捨てて逃げたのに今更父親づらがしたいのかと。しかも逃げた先でばくち打ちに成り下がって…
登　あ、えーと、それは…
登一郎　でも今ではあんなに立派な道場を建てらてて、更生なさったんですね。
登　更生、更生か。まあ、そうだね。

登一郎　安心しました。
登　　あ～じゃ、ま、いっか。
登一郎　え？
登　　いやいや、こっちのこと。実は私には夢があってね、この天然理心流という流派をこの浜松だけでなく日本全国に広めたいと思っているのだよ。
登一郎　…。
登　　登一郎君、どうした？
登一郎　猛烈に感動してしております。
登　　は？　感動？
登一郎　父上殿が人殺しの博打うちから、立派に更生されて…立派になりましたねえ。
登　　…親子逆だよそれじゃ。
登一郎　父上殿のその夢、微力ながらこの登一郎にも手伝わせてください。
登　　手伝ってくれるかね？
登一郎　はい。
登　　登一郎君！
登一郎　父上殿！

固い握手を交わす二人。

登　　続きは家でやろうか。
登一郎　そうですね。
登　　（玄関に向かって）ただいま～。
登一郎　ただいま戻りました～。

家の中から「おかえりなさい」とヨシとヨネ。なんのかんのと四人、奥に消える。

甘利と内山がやってくる。

内山　　ふむふむふむ、なるほどな。つまりは同じ町内に剣術道場を建てて、中島登がやっている剣術道場よりも繁盛させ、上手いこと門下生も奪って経済的に打撃を与えると、そういう作戦というわけやな。
甘利　　そうだ。
内山　　…まわりくどない？
甘利　　多少な。だが金は幾らでもある、それに時間をかけてもかまわないとのことだからな。
内山　　なるほどなぁ。

甘利　何より…ただ殺すだけじゃ俺の気持ちがおさまらない。
内山　…そうか。そうだな。
甘利　ああ。
内山　しかしだからと言って正面から行くことないんでないの？　こっそり道場建てたらええやん。
甘利　正面から喧嘩を売るから面白いんじゃないか。ようやく得た安住の地でやっとのこと建てた剣術道場、そこに通う門下生が一人、また一人と新しく出来た道場に奪われていく。剣術の腕のみで幕末の世を駆け抜けた新撰組隊士としての誇りもずたずたよ。
内山　…甘利。
甘利　？
内山　暗い。
甘利　え。
内山　まあ、だが一理ある。俺も叔父を新撰組に殺されとる身や。奴らの誇りを粉々に粉砕するのは賛成や。ほないこか。
甘利　内山。
内山　なんや？
甘利　暗いか？
内山　あん？
甘利　俺は、暗いか。そんなに暗いのか。
内山　…。
甘利　こう、なんとういうか見た目も暗いのか？　通りすがりの人にまで暗い印象を与えてしまうくらい暗いのか？
内山　……逆に明るいけどな。
甘利　え？
内山　うん。
甘利　そうか。逆に
内山　逆にな。
甘利　逆に。
内山　うん、ほないこか。（小声で甘利の悪口を言う）
甘利　（玄関に向かって）ごめん！

「は～い～」とヨネが出てくる。

ヨネ　どちら様でしょう？
甘利　わたくし、甘利と申すもの、御主人にお取次ぎ願いたい。

ヨネ　はいはい、丁度今帰ってきたとこですのよ。え～と甘利様と？
内山　う、内山田と申す。
ヨネ　内山田様ですね、どうぞどうぞ、おあがりになってお待ち下さい。
甘利　失礼いたす。
ヨネ　い～え～

ヨネが奥へ消える。

内山　（声を殺してキレながら）何を本名名乗っとんねんワレ！
甘利　（完全に対抗して）正面から堂々とって言っただろうが！
内山　アホか！　そこまで正面きる必要がどこにあんねん！
甘利　内山田とか中途半端な偽名名乗った奴に言われたくないんじゃ！
内山　ああ？
甘利　ああ？

近い距離のガンのくれあい飛ばしあい。
登が入ってきて姿勢を直す。
登一郎は縁側のあたりで会話を聞くともなしに雑務をしている。
部屋の奥にいるヨネとヨシに下らない下ネタを言いながら入ってくる登。甘利の顔を見てまた笑う。

登　失礼（座り）中島登と申します。
甘利　甘利、正太郎と申します。
内山　内山田冷五と申す。
登　れいご？　変わった名ですな。
内山　冷やすに五（手のひらをかざす）と書きます。
登　ふんふん、なるほど。

沈黙

登　して、どのような御用向きで。
甘利　この町内に剣術の道場を開きたいと思っております。
登　剣術の道場？
甘利　はい、わたくし少々剣を使います、ここにいる内山田は門人、一番弟子でございます。
内山　（釈然としない）一番弟子です。

登　なるほど。
甘利　既にこの町内には天然理心流なる流派の道場があると聞き、こうして御挨拶に伺ったしだいであります。
登　それはわざわざご丁寧に。

沈黙

甘利　それだけですか？
登　それだけと言いますと？
甘利　西南の役よりこっち、嘆かわしいことに世の中では剣術離れが進んでおります。
登　そうですなぁ、まことに嘆かわしい。
甘利　そのような御時世に同じ町内に道場が二つ、これがどういう事態になるかおわかりになりませぬか？
登　あ～。
甘利　ご理解、頂けましたかな？
登　わかりました、うちがたたみましょう。

三人「え？」

登一郎　ちょ、父上殿、何を言って…
登　ああ！

三人驚く。

登　そうだ、妙案があるぞ、（奥に向かって）ヨネ、あれを持ってきなさい、地券、ほら道場の土地の権利証だ。

ヨネがすぐに来て。

ヨネ　これかしら？
登　甘利殿、これをお持ち下さい。
甘利　は？
登一郎　父上殿、どういうつもりです！
登　これはうちの道場の地券です。これをあなたにお譲りしましょう。
甘利　い、いや、しかし、金が。
登　いいんですいいんです金なんて。

甘利　いやしかし。
登　これがあればわざわざ新しく道場を建てる必要もない。土地、道場、門弟、まるっとあなたに差し上げましょう。
甘利　いや、これは、しかし、参ったな。
内山　中島殿、これを、道場を我々に渡してしまって、明日からの暮らしはどうするのです？
登　そんなもんはなんとでもなります。
甘利　いや、しかし、奥方、よろしいのですか？
ヨネ　あい、いつものことです。
甘利　いつものことって…
内山　甘利殿、ここは中島殿の御厚意に甘えましょうぞ。
甘利　いや、しかし。
内山　中島殿、受け渡しなどの段取りはまた後日改めて。
登　承知仕った。
内山　甘利殿。
甘利　ん、ああ。では。

二人が出ていく。

ヨシが顔を出して。

ヨシ　なあに、義兄さん、また病気？
登　病気とは酷いな。
ヨネ　いつものよ、ね。
登　というわけですまんな、また苦労をかけるが。
ヨネ　いいえ、あなたのお好きになさって下さい。
登一郎　待って下さい！
登　どうした、登一郎君。
登一郎　どうしたじゃないでしょう？　おかしいでしょう？
登　おかしい？　何がかな？
登一郎　なぜ見ず知らずの人間に道場をあげてしまうんです？
登　ああ、そのことか。
登一郎　そのこと以外に何かありますか？
登　登一郎君、いや、登一郎君。では逆に聞くが、なぜ見ず知らずの人に道場をあげてはいけないのかね？
登一郎　…はあ？（全力のはあ？）いや、だから、他にやりようがあるでしょう？　家賃

を取って貸すとか、だいたいあの人たちはこれから道場を建てようとしてたんだから金が無いわけないでしょう！　それにそもそも、断れば良いでしょう？　同じ町内に道場は二つもいらないって。それに、それに、明日からどうするんですか？　どうやって生活していくんですか？

登　　それをこれから考えよう、今日から、な。

登一郎　…夢は？

登　　ん？

登一郎　天然理心流を全国に広めると僕に語った夢は？

登　　…それは、すまんと思ってる。

登一郎　…父上殿は何も変わってない！　何も成長してない！　この博打うち！　ろくでなし！

登一郎が出ていく。

ヨネ　　あ。

ヨシ　　ここはまかせて。

ヨシが後を追う。

沈黙。

登　　難しいものだなぁ、親子と言うのは。

ヨネ　　難しく考えたら、難しいんでしょうね。

登　　そうだな。

ヨネ　　誰も最初から親だったわけではありませんから。

登　　…。

ヨネ　　少しずつ、親子になっていきましょう、一緒に。

登　　そうだな。

ヨネ　　あい。

登　　…しかし、その、すまんなぁ、また悪い病気が出た。明日からまた苦労をかけると思うが。

ヨネ　　ううん。生きたいように生きて下さい。私はそばにいますから。

登　　ありがとう。

ヨネが奥の部屋へ行く。

絵の続きにとりかかる登。

登　…しっかし、ろくでなしの博打うちか。（絵に向かって）酷い言われようですよ、土方さん。

いつのまにか土方がいる。

土方　だって、博打うちじゃないか。

登　近藤局長の命令じゃないですか。

土方　（笑）そうだったな。

登　まったく。

土方　（芝居がかって）中島君、君の入隊は認めよう。しかし君には特別な任務を与える。

登　特別な任務ですか？

土方　知っての通り新撰組の拠点は京都にある。しかしのちのことを考えると関東の情報をおろそかにしてはまずいことになる。

登　はぁ。

土方　そこでだ、君には関東の探索を命じる。

登　関東の、探索ですか？

土方　ああ。身分を隠し博徒や遊侠の徒、卑賤の民と交われ。そして彼らの信頼を得て、いざという時に彼らが幕府の味方になるように内部から仕向けるのだ。

登　承知いたしました！

土方　（笑）こんな感じだったかな。

登　ええ、そんな感じでした。おかげさまで私は新撰組本体に合流するまで三年間一人で黙々と博打をうち、親類一同からはすっかり見はなされました。「登は人を殺めた上に博打うちに成り下がった」と。

土方　だが、おかげで隊士が増えた。鳥羽伏見の戦いで多くの隊士を失った新撰組が江戸に戻ってから二百名もの隊士を補充出来たのは君の力によるところが大きい。

登　あれは浅草弾左衛門殿に御尽力頂いたからです。

土方　まあな、だが君の地下における活動、根回しが無ければ上手くは運ばなかっただろう。

登　こつこつと博打をうち続けていた甲斐があったというものですな。

土方　まあそうだ。

登は絵を描き続けている。

土方　しかし、上手いものだな。
登　そうでしょうか？
土方　まあ言われてみればそこそこだな。
登　…。
土方　誰かに習ったのか？
登　全くの独学です。必要にせまられて覚えたと言いますか。
土方　必要にせまられて、か。
登　はい。一人で関東を探索している時になんでも絵にして記録しておく事を覚えたのです。街道の様子、外様大名の城の外観、地形図なんかも描きました。そのうちそれが習慣になったわけです。
土方　ふ～ん。
登　ひょっとすると近藤さんはこういう事態になることを予期していたのかもしれませんね。
土方　こういう事態？
登　幕府が倒れ、関東で戦が起こる。その時に備えて、私を関東に残した。
土方　ふむ。しかし実際は関東なんかはとっくの昔に通り過ぎてとうとう蝦夷にまでやってきてしまった。流石の俺もそこまでは予想してなかったよ。
登　？
土方　君にその役割を与えたのは俺なんだよ、俺が近藤さんにそう進言した。
登　そうだったんですか。
土方　ああ。
登　ということは私の絵の師匠は土方さんということになりますな。
土方　？
登　きっかけを与えて下さったわけですから。
土方　ほぅ、なるほどなぁ。そう聞くと不思議と上手に見えてくるもんだなぁ。
登　いや、そこそこですよ。
土方　ん？
登　だって師匠がそこそこですから。
土方　ん？　ん？
登　土方さんって俳句やりますよね、あれ、そこそこですよ。
土方　んん？
登　「しれば迷ひ　しなければ迷はぬ　恋の道」これ、土方さんが作った俳句ですよね。これ、そこそこですよ。字余ってるし、季語入ってないし。
土方　中島君。
登　なんでしょう？
土方　（刀を抜き）命のやりとりをしようじゃないか。

登　　のぞむところです。
土方　？
登　　そこそこ！
土方　！
登　　そこそこ！
土方　ああ！（大悶絶）

土方が走り去る。

登　　そこそこ！

登も追いかけて去る。

別の場所、登一郎がたたずんでいる。

ヨシがやってくる。

ヨシ　（背後から）わ！
登一郎　うわあ！
ヨシ　（笑）
登一郎　なんだヨシさんか、脅かさないで下さい。
ヨシ　ごめんなさ〜い。
登一郎　（膝を抱えてヨシを無視しようとする）
ヨシ　ちょっと、登一郎さん。
登一郎　（いじけている）
ヨシ　登一郎さんってば。
登一郎　（いじけている）
ヨシ　何をそんなにいじけてるの。
登一郎　べそべそべそべそ。
ヨシ　もう！　べそべそしない！
登一郎　…ヨシさんは平気なのですか？
ヨシ　平気って、何が？
登一郎　あんな父上殿が…兄上で。
ヨシ　えっと、父上殿が兄上…ああ、そういうことね。
登一郎　おかしいとは思わないのですか？　急に道場を人にあげたりして。
ヨシ　まあ、おかしいとは思うわよねぇ。

登一郎　それだけですか？
ヨシ　それ以外に何か？
登一郎　…。
ヨシ　初めてのことじゃないからねぇ。
登一郎　今までにも似たようなことが？
ヨシ　まあ、そうねえ。気前が良いと言うかなんというか。
登一郎　私は自分が捨てられた時のことを思い出しました。
ヨシ　え？
登一郎　ある日、父上は突然私を捨てた。道場をあっさり人に渡したあの執着の無さ、父上殿は何も変わっていない。きっとあの日私を捨てたように、これからも大切なものを急に捨てたりするんだ、きっと。
ヨシ　…ははーん、わかったわ、登一郎さん、あんためんどくさい人ね。
登一郎　え？
ヨシ　なんでそう悪い方悪いへと考えるのよ、もっと前向きに生きなさいよ。
登一郎　父に捨てられ、母にも捨てられ、親戚の家に預けられ人殺しの息子と蔑まれ肩身の狭い思いをして育った人間の気持ちなんて、ヨシさんにはわからないんだ。
ヨシ　そんなこと…わかったわよ、ちょっと待ってね、想像してみるから…ごめんやっぱわかんない。
登一郎　諦めるの早っ。
ヨシ　だってきっとわからないもの。そんなことに時間かけてらんないわ。
登一郎　良い性格ですね。
ヨシ　よく言われる。
登一郎　…僕には父がよくわからない、何を考えてるのか、何をしたいのか。
ヨシ　そんなの当たり前じゃないの、ずっと離れて暮らしてたんだし。急に全部知りたがるなんてね、そんなのは欲張りってものよ。
登一郎　…。
ヨシ　…登一郎さん、あなたに今必要なものが何かわかったわ。
登一郎　え？
ヨシ　甘いものよ、近所に良い甘味屋さんがあるの、行きましょう（引っ張る）
登一郎　そんな、僕は今は甘いものっていう気分じゃ、それに実は苦手なんです甘いものって。
ヨシ　登一郎さん、一つお父さんのことで教えといてあげる。「食べ物のことについては一切好き嫌いを言うな」家訓だそうよ。
登一郎　そうなんですか？
ヨシ　一度姉さんの味付けにケチつけたら烈火の如く怒られたわ。後に先にも義兄さんが怒ったのを見たのはあの時だけ。

登一郎　知らなかった。
ヨシ　というわけで甘いものを断るのは許されないの、行くわよ。（引っ張る）
登一郎　あ、ちょっと、引っ張らないで。

二人が消える。

鐘の音が聞こえる。

石灯籠に灯がつく。

甘利と内山がいる。

内山　…どないなっとんねん。
甘利　…。
内山　いったいなにもんやねんアイツ。
甘利　…。
内山　普通やらへんやろ、初対面の人間に道場を、それも土地ごと。
甘利　…。
内山　（石灯籠に）お前もお前でなに道場主になっとんねん！
甘利　そんなこと俺にだって…
内山　え？（「あの～僕は石灯籠に向かって半ばふざけて言ってるんでそんなに本域の気迫で迫られても困るんですけど」という顔）
甘利　あ。

沈黙

甘利　だから…そんなこと…俺にだってわかるかよ。
内山　…で、どやった？　長年憎み続けてきた男と出会った感想は。
甘利　…正直よくわからん。
内山　ほぉ。
甘利　俺の空想の中ではもっとこう絵に描いたように憎々しい奴と言うか、見るからに悪人を想像していたのだが。
内山　おう、それは俺もそう思っとった。
甘利　ところが、出てきたのは…
内山　ちょっとした初老のおっさんやったな。
甘利　そうなんだ、ちょっとした初老のおっさんなんだ。奴が父を殺したのだと、どう

しても想像できなかった。
内山　でもまあ、そうやねんで。
甘利　？
内山　あれがお前の父親を殺した男や。
甘利　…。
内山　…どうする？
甘利　…。
内山　やめるか？　標的はほかにも幾らでもおんねん。
甘利　…馬鹿な、ようやく見つけた父の敵だぞ。
内山　…そやったな。
甘利　ああ。
内山　一つ聞いてもええか？
甘利　ん？
内山　お前の親父さんはなんで殺されたんかのう？
甘利　なぜそんなことを聞く？
内山　ふと気になってな。あの中島登という男、幾ら元新撰組隊士とは言えただやみくもに人を殺すような男には見えんかったからのう。
甘利　…父と中島は親友だったそうだ。
内山　ほう。
甘利　…。
内山　親友が親友を殺すかね。
甘利　…。
内山　なんや、痴情のもつれか？　それとも金絡みか？　人が人を殺す理由はこの二つくらいしかあらへんやろ？
甘利　違うよ。
内山　じゃあなんやねん。
甘利　もう一つある、人が人を殺す理由は。
内山　ん？
甘利　志の違いだ。
内山　志の違い。
甘利　八王子という土地は特殊な土地でな、あの辺りの住民は元々みな武田家の家臣だったんだ。
内山　武田家っちゅうと織田信長に滅ぼされた？
甘利　ああ。長篠の戦いで滅ぼされた武田の生き残りの家臣を徳川家康が匿い八王子に住まわせた。そうして生まれたのが八王子千人同心さ。
内山　そやったんか。

甘利　前にも言ったかもしれないが同心と言っても身分は農民扱いだ。だがなこの武田の子孫の農民たちは徳川への感謝の念を二百六十年間忘れなかった。
内山　律儀なもんやのう。
甘利　ああ。幕末に黒船が来航し幕府の屋台骨が揺らいだ時、今こそ徳川への恩を返すときだという機運が高まった。その中から新撰組も生まれた。
内山　そうか、そう言えば近藤や土方もそのあたりの生まれやったのう。
甘利　だがな、わが父、甘利兵衛はそんな八王子千人同心の中では異質な存在だった。
内山　異質な存在。
甘利　もはや徳川幕府では異国に対抗することは出来ない、幕府はすぐにでも大政を奉還し、天皇を中心とした諸藩による合議制の国家にするべきだ。それを受け入れられないのなら幕府を倒すべし、とな。そう言ってはばからなかったそうだ。
内山　おお、随分と先見の明のあった父上なんやのぉ。
甘利　ああ。だがそこは八王子だ、武州だ。父上の考え方は徳川に背く危険思想と捉えられた。同心の仲間が何度も説得にあたったが父が節を曲げることはなかった。
内山　…それで？
甘利　結果、父を誅することになった。選ばれたのか自ら望んだのかは知らんが、あの中島登が父を斬った。
内山　…なるほどのぉ。
甘利　…。
内山　気の毒にのう、生まれた場所さえ違えば、お前の親父さん、今では明治政府の高官になっとったかもしれんのに。
甘利　…どうだかな。今の政府は薩長の連中に私物化されているようにしか俺には見えない。父が生きていたら嘆いていたんじゃないか。
内山　かもしれんのぉ。
甘利　ああ。
内山　して、どうする？
甘利　しばらくは様子を見るしかないだろう。道場を運営していかなくてはならんしな。
内山　…そうやな。なんとも妙な流れになってきた。
甘利　…時間はあるんだ。ゆっくりやろう。
内山　ん。おや？

有栖川兄弟がやってくる。口の中いっぱいに握り飯をほおばっている。

内山　おう、お前らか。
鶴太郎　（「おつかれさまです」とか言ってるのだがよく聞こえない）。
内山　ん？　なんて？

鶴太郎　（もごもご言ってる）
内山　なんやねん？　何をほおばってんねん。おい、亀吉、お前の兄ちゃんどうなっとんねん。
亀吉　（同じくもごもご）
内山　お前もかい。食いながら話すな。どないしてん。
鶴太郎　（咀嚼し終えて）実は握り飯をもらいまして。
内山　握り飯？
鶴太郎　はい。
内山　誰に？
鶴太郎　おそらく中島登かと。
内山　は？
鶴太郎　はい。
内山　どういうこっちゃねん。
亀吉　は、いつものように中島家に忍び込み隠れていましたところ…
内山　おう。
亀吉　いつも御苦労さんだね、と声をかけられ、しばらくしてから出てみると目の前に握り飯が置かれておりまして。
内山　ああ、隠れてて、御苦労さん言われて、出てみたら握り飯ってお前らそれ完全にバレとるやないかい！
鶴太郎　いえ、顔は見られてません！
内山　そういう問題やないねん！
鶴太郎　ですが、顔は見られてません！
内山　だからぁ！　もうなんやねんお前ら。叱れ甘利、こいつらを叱ってやれ。
甘利　…。
内山　甘利？
甘利　……鶴太郎、亀吉。
鶴・亀　は！
甘利　お前ら、金が欲しいか？
鶴・亀　（見合わせて）は！
甘利　ではお前らに仕事をやろう。
鶴太郎　ありがとうございます！
甘利　…。
鶴太郎　で、その、仕事とは？
甘利　…中島登を、殺せ。
鶴太郎　え？
甘利　ああ。

鶴太郎　…中島登を、殺すのでありますか？
甘利　そうだ。
鶴太郎　…。
甘利　成功したら千円やろう。
亀吉　せ、せせせ、千円！
甘利　そうだ。

沈黙

鶴太郎　…しばらく考えさせて頂いてもよろしいでしょうか？
甘利　ああ、もちろんだ。
鶴太郎　それでは。

鶴太郎が去り、追うように亀吉も去る。

内山　もの凄いこと思いつくの、お前。
甘利　そうか？
内山　あんのか？　千円なんて。
甘利　（懐から金を出して見せる）これはまだほんの一部だ。お前も足りなかったら言え。
内山　なんでお前みたいなもんがこんな大金もっとんねん。
甘利　出してくれる連中がいるんだよ。
内山　あ？
甘利　幕末の京都で新撰組に追い回されたり仲間を殺されたりした連中が今の明治政府にどれだけいると思ってる？　俺に金を出してるのはそういった連中さ。
内山　なんや、そういうからくりやったんかい。
甘利　今では政府の高官で自らの手を汚すわけにはいかない。が、金はある。
内山　なるほどの、連中が考えそうなことや。
甘利　ああ。
内山　くさっとるの。
甘利　ああ。
内山　お前もや。
甘利　あ？
内山　嫌な顔しとったで、さっき。
甘利　…嫌な顔にもなるさ。
内山　ああ、それもわかっとる。俺かてお前と似たようなもんや。

甘利　…。
内山　あいつら、やるかの？
甘利　…わからん。
内山　わしらはわしらで別の戦略を練らんといかんの。
甘利　ああ。

内山が甘利をポンと叩く。
肩だけ動かして払いのける甘利。
寂しくて石灯籠の肩を叩く内山。

別の場所には有栖川兄弟。

鶴太郎　…。
亀吉　…兄ちゃん。
鶴太郎　…。
亀吉　…ねえ、兄ちゃんってば。
鶴太郎　…。
亀吉　兄ちゃん、いったい何を考えてんのさ。
鶴太郎　…。
亀吉　まさか本気で人を殺そうなんて考えてないよね？
鶴太郎　…。
亀吉　なんか言えって兄ちゃん！
鶴太郎　うるさいな！　ちょっと黙ってろよ！
亀吉　だめだよ、兄ちゃん、いくらなんでも人殺しだけは駄目だよ。
鶴太郎　まだやるなんて言ってないだろ。
亀吉　考えるだけでも駄目なんだよきっと、それは。
鶴太郎　亀吉。
亀吉　なに？
鶴太郎　千円だぞ。
亀吉　…。
鶴太郎　わかってるのか？　千円だぞ？　あの中島登一人殺すだけで千円なんだぞ。
亀吉　でも…
鶴太郎　千円あればどうなる？　おっとうやおっかあだけでねぇ、村のみんなを救ってやれんだぞ。
亀吉　それは…
鶴太郎　…でもそれは人殺しで～中島登が～千円～あ～う～。

亀吉　…なんだ、よかった、もう覚悟を決めちまってたのかと思った。
鶴太郎　馬鹿たれ！　俺だってそう簡単に人殺しに成り下がるようなアホでねぇ。
亀吉　そうだね！　うん！　うん！　ごめんよ。
鶴太郎　…でも、千円は…欲しいいいいぃ。
亀吉　あ、兄ちゃんが自分と戦ってる！

雄叫びながらいなくなる鶴太郎、それを追う亀吉。

音楽。

暗転。

日が変わる。

玄関先でヨネと石田が話している。

石田　え？　それで道場を人にあげてしまったんですか？
ヨネ　そうなんですのよ。
石田　どういうつもりだ中島君。
ヨネ　え？
石田　いやいや。でもそれじゃ奥様は大変でしょう？
ヨネ　いえいえ、そんなことも無いんですよ。すぐにね、なんだか農業に目覚めましてね。
石田　ほう、農業ですか。
ヨネ　折よくお国の開墾事業がございましてね。それに参加するかたちで。
石田　ほお、それはそれは、良かったじゃないですか。
ヨネ　（庭に植えてある植物を見て）以前から植物を育てるのは好きでしたからね、本人も楽しそうです。
石田　あれは？
ヨネ　葉蘭というそうですよ。
石田　ああ、寿司に使われるあれですね。
ヨネ　そうですそうです。主人が一番好きな植物だそうなんです。
石田　…また随分と地味な植物を愛したものですな。
ヨネ　ねえ。
石田　しかしまあ、道場を辞めてしまったとなると、もはや石田散薬の出番はなさそうですな。
ヨネ　そんなこともありませんのよ。農作業っていう案外重労働だったりしますし、擦り傷切り傷は絶えませんからねぇ。
石田　おう、それはそれは。
ヨネ　それに、いい加減お代を払わせて下さいな。なんのかんのと、今まで一度もちゃんと支払えた試しがありませんもの。
石田　それはもちろん…ん？　（登の気配を感じ）奥様、これを。（薬を押し付け）ごめん！

石田が消える。

ヨネ　ちょっと、薬屋さん！　いつか必ず支払ってみせる…これは私の戦い。

家の前に登と登一郎が現れる。
野良仕事の後なのか二人とも汚れた格好。
農具を抱えている。

登　いや～しかし今日も働いたな。
登一郎　はい。
登　しかしやはりあれだな。登一郎君は流石に八王子の育ちだ。農作業の手際が良い。
登一郎　父上殿こそ。
登　我ら八王子千人同心、元々は武士とはいえ、流れている血の半分はやはり農民なのだなぁ。
登一郎　子供の頃からよく農作業を手伝わされましたから。やはり土に触れているとなんだか懐かしいような気持ちがします。
登　そうだな。
登一郎　ええ。…しかし安心しました。
登　安心？
登一郎　道場を人に譲り、剣術を捨ててしまった父上殿がまた元の博打うちに戻ってしまうのではないかと心配していたのですが、どうやらそのようなこともなさそうで。
登　あの時は苦労をかけたね。
登一郎　いいえ、良いんです。父上殿はこうして新たな道を見つけられた。私はそれが嬉しいんです。
登　…そうか。
登一郎　はい。
登　…登一郎君。
登一郎　はい？
登　…今回の開墾作業なかなか骨が折れたが、今日でひと段落だろう。
登一郎　ではいよいよ。
登　ああ。
登一郎　何を、何を植えましょう！
登　何が良いと思う？
登一郎　んー。
登　あの辺りの台地は水はけも良い、それに赤土ときてる。ということは？
登一郎　米ですかな？
登　…いや。
登一郎　え？
登　茶だな。
登一郎　茶？　お茶ですか？

登　私はこの静岡という土地が茶の一大生産地になる可能性があるとみている。
登一郎　そうでしょうか？
登　来る。日本中の人々がお茶と一緒に俳句を楽しむような世の中がきっと来る。
登一郎　そうですかねぇ。
登　百年後の未来に日本中の人たちがここ静岡の茶を飲む日がきっとくる。登一郎君、私はその日のためにこの土地に骨を埋めようと思う。
登一郎　父上殿。
登　この静岡の日本一の茶の生産地にする、それが今の私の夢だ。
登一郎　夢。
登　ああ。
登一郎　父上殿！　私にもその父上殿の夢、手伝わせて下さい！
登　やってくれるか、登一郎君！
登一郎　父上殿！
登　登一郎君！
登一郎　父上殿！

がっちりを握手をする二人。
団子を食べながらヨシ通りかかる。

ヨシ　何してるの？
登　…登一郎君、続きは家でやろうか。
登一郎　そうですね、もうそこですし。
登　おーい、今戻ったぞ。
ヨシ　お姉ちゃ～ん、ごはん食べに来たわよ～。

奥からヨネがやってくる。

ヨネ　あらあらおかえりなさいませ。あらヨシちゃんいらっしゃい。
登一郎　ただいま戻りました。
ヨネ　おかえりなさい。あら？　二人ともなんだか良い顔してる。何か良いことありました？
登　ん、まあな。食事の時にでもゆっくり話そう。
ヨネ　あら、それは楽しみね。あ、そうそうあなた。
登　ん？
ヨネ　さきほどあなたを訪ねてきたかたがいらっしゃったのよ。
登　私を？

ヨネ　ええ。
登　誰だろうな。
ヨネ　ごめんなさい、名前をお伺いするのを忘れてしまって。あ、でもまた出直して来るって言ってらしたわ。
登　そうか。わかった、じゃあまあその前に飯にしようか。
ヨネ　はい。

玄関口から大島が入ってくる。

大島　失礼しま……中島君、君か。
登　…大島さん、無事だったんですね。

大島が泣き崩れる。

登　ヨネ、飯は少し後にしようか。

遠くで鐘の音が聞こえる。

いつのまにか夕暮れがおとずれている。

登と大島は居間に。

ヨシと登一郎は盗み聞きをしている。

ヨネが茶を運び奥に消えるがすぐにヨシと登一郎と合流する。

大島　さきほどは見苦しい姿をお見せしてしまった。
登　いえ。しかし、無事で良かった。最後に会ったのは…
大島　会津戦争の時です。彰義隊の生き残りとして戦っていた私は母成峠の戦いの際に腹を撃たれ、もはやこれまで覚悟していたのを…君が…私を担いで…救護所まで運んで…それによって私はこうして生きながらえ…ちゅー！（泣き方が下手）
登　大島さん、泣かんで下さい。
大島　ああ、すまない。しかし驚きましたよ。中島君がこうして生きていて、しかも近所にこの浜松に住んでいるなんて。
登　僕もですよ。
大島　…みんな、死にましたからな。

登　…そうですね。

沈黙

ヨネ　ちょっと、二人はいったい何を話してるの？
登一郎　よく聞こえないんんです。
ヨシ　しー！

大島　御家族には新撰組だったということは？
登　言ってません。新撰組だったことが知られてはいざという時に迷惑をかけることになるかもしれませんし。
大島　そうですなぁ。

ヨシ　なんか新鮮新鮮って言ってるわよ。
登一郎　野菜の話ですかね？
ヨシ　なんで久しぶりに会ったもの同士が野菜の話をするのよ。
ヨネ　じゃあ魚の話かしら？
ヨシ　なんで久しぶりに会ったもの同士が魚の話をするのよ。

登　大島さんは、今は？
大島　裁判所で代書人をしております。
登　立派なお仕事じゃないですか。
大島　いやいや。

ヨシ　裁判所の代書人ってどんな仕事なのかしら？
登一郎　現在の言葉で言うと行政書士ってやつですね。
ヨネ　現在の言葉？
登一郎　いえ、こっちのことです。
ヨシ　誰に向かって話してるの？
登一郎　さあ。

大島　中島君は、今は何を？
登　以前は剣術道場なんかをやっておりましたが、今は農業を。
大島　そうですか。うん、しかしそれは正しい選択かもしれませんな。西南戦争が終わり、おそらくこれで幕末より続いた日本国内での争いは収束するでしょう。そうなれば剣の道を志すものも減る。

登　ええ。
大島　これで武士の時代が完全に幕を閉じる。
登　はい。
大島　正直なところ、寂しい気もしますが。
登　…はい。
大島　中島君は西南戦争に参加しようとは思わなかったのですか？
登　え？
大島　君は、近藤局長が捕縛されたとき変装して官軍を追いかけ、奪い返そうとしたそうじゃないですか。それほどの人です、生きていたら西南戦争にも参加しているだろうと勝手に空想していたのです。
登　…きっと、私の戦争は函館で終わっていたんですよ。それにあの戦争、西南戦争はどちら側の心情も理解できてしまいましたからね。
大島　不思議なものですな。幕末の頃、我々にとっては宿敵だった西郷隆盛が、結果的には全ての武士の魂を引き受けて死んだわけですから。
登　ええ。
大島　そうそう、斉藤さん、あの人は参加したらしいですよ。
登　斉藤さん？　新撰組三番隊組長の斉藤一さんのことですか？　斉藤さん、生きてたんですか？
大島　はい。彼は政府側の警察抜刀隊として参加し負傷しながら敵の大砲を奪ったそうです。
登　相変わらず化け物ですな、あの人は。
大島　はい。
登　…そうか、斉藤さん、生きてたのか…あ、ってことはちょっと悪いことしてしまったなぁ。
大島　？
登　ああ、いや、これです。（絵を一枚取る）。
大島　おお、これは。
登　ともに戦った仲間の絵を描いているのですがね。
大島　山口二郎、享年２７歳。確か山口二郎というのは…
登　斉藤さんの変名です。勝手に殺してしまった。如来堂の戦いで３００人を相手に突っ込んでったと聞いたので、てっきり戦死してるもんだと思っていました。
大島　まあ、あの人は化け物ですから。

客席に石田がいる。

石田　（くしゃみ）このくしゃみ、誰かに化け物呼ばわりされている気がしなくもない。

デタラメな呼び込みをしながらすぐにいなくなる。

ヨネ　ちょっと、二人はいったい何を話してるの？
登一郎　ここからでは、でもなんだか深刻そうな話をしてます。
ヨシ　ちょっと、登一郎さん、変なとこ触らないでよ、責任とってもらうわよ。
登一郎　はい。
ヨシ　え？
登一郎　責任ですよね？
ヨシ　…え？
登一郎　え？
ヨシ　え？
登一郎　え？
ヨネ　…ええ！

登と大島が気がつく。

ドタドタと崩れる三人。

登　な～にをやってるのかね？
ヨネ　いえいえ、なんでもございませんのよ。それにしても、え？

登一郎とヨシは見合ったまま隣の部屋へ、ヨシも追うようにいなくなる。
が、しばらくするとメガホン状に丸められた紙を使ってふたたび盗み聞きする三人。

登　変な家族。しかし、こうしてかつての仲間の消息を聞けるのは嬉しいものですな。
大島　…。
登　大島さん？
大島　…これも、君の耳には入れておいた方がいいのでしょうなぁ。
登　？
大島　安富才助君、覚えてますか？
登　忘れるはずがないでしょう、最後まで一緒に戦った同士ですから。土方さんの最期を看取ったのもあの人です。
大島　…。
登　安富さんがどうしたんですか？
大島　死にました。
登　死んだ？

大島　それも、どうやら、誰かに殺されたようなのです。
登　殺された？　誰かって、誰にです？
大島　それはわかっていないそうです。
登　…そんな、安富さん。
大島　それから、相馬主計君。
登　相馬さんも殺されたって言うんですか？
大島　彼の場合は自殺と伝えられていますが、その死にかたに不審な点が多い。
登　…相馬さんまで。
大島　他にも旧幕臣や元新撰組隊士で消息を絶った者は多いと聞きます。これはあくまで噂なのですが、一連の事件は明治政府の高官が裏で糸を引いているのではないかと。金で人を雇い、暗殺を。
登　…。
大島　ですから中島君、あなたも気をつけた方が良い。
登　…。
大島　中島君。
登　はい。
大島　気づいておられるとは思いますが…。
登　え？　ああ、はい、それは。
大島　今、お話しした件もあります。
登　あ、いや、でも彼らはそんな感じじゃ、でも確かに今日はいつもと様子が違うな。
大島　（立ち上がり）おい、貴様ら、いったいどういうつもりだ？

返事は無い。

大島　隠れてないで出て来い！

丸めた紙を耳に当てたヨシ、ヨネ、登一郎の三人がすごすごと出てくる。

急に出てきて大島に襲いかかる鶴太郎。一撃でひっくり返り武器を奪われる。亀吉も襲いかかるがやはり大島に一撃でやられる。亀吉のクビに刃物を押し付ける大島。

亀吉　ひい！
鶴太郎　亀！
大島　何者だ、貴様ら？
亀吉　（怖くて言葉にならない）
大島　言え！

亀吉　ぁぁぁ。
大島　捕虜は二人もいらないな、貴様、死ぬか？
亀吉　ひぃぃ、兄ちゃん！
大島　兄ちゃん？　兄弟なのか貴様ら？
鶴太郎　（土下座しながら）おさむれえさま！　おねがいします！　どうか！　どうか！
弟の命だけは助けてやってください！　おらが、おらがかわりに死にますから！
亀吉　兄ちゃん！　嫌だ！　兄ちゃん死んじゃ嫌だ！
鶴太郎　おねがいします、おさむれえさま！　どうか！　どうか！　弟だけは！
大島　あのな、今は明治だ、私が侍なわけがないだろう。
鶴太郎　おさむれえさま！
大島　だから…
登　大島さん、離してやってくれませんか。
大島　しかし…
登　お願いします。
大島　…まあ、中島君がそう言うなら。

解放され、寄り添う二人。

登　どうしたんだ、急に。いつもそんなことなかったじゃないか。

何も語らない二人。
亀吉は怯えているが、鶴太郎は急に不敵な態度になる。

鶴太郎　…話すことは何もねえ。
大島　急に態度を変えおって貴様あ！
亀吉　ひい！
登　大島さん。
大島　…。

登が鶴太郎の正面にかがみこむ。
無言で鶴太郎の頬を張る登。

登　どんな理由があろうと、人を殺そうなんて思っちゃいかん。
鶴太郎　…。
登　死んだ人間の命は重いぞ。それが、自分が殺した人間の命だったら尚更だ。
鶴太郎　…。

登　狙いは私の命かね？
鶴太郎　…。
登　そうか。
大島　誰に雇われた？
鶴太郎　…。
大島　薩摩か？　長州か？　土佐の連中か？
鶴太郎　…。
大島　言わんか！
登　大島さん。
大島　しかし！　こいつらが安富君や相馬君を…
登　ありえません。
大島　しかし！
登　新撰組です。…安富さんも相馬さんも新撰組なんです。彼らに殺せるはずがない。
大島　それは、まあ…しかし、こいつらの背後に何者がいるのか、それくらいは吐かせないないと…
登　大島さん。（笑）私はそんなことには興味は無い。
大島　興味が無いって…
登　…君たち、名前は？
鶴太郎　…。
亀吉　亀吉。
鶴太郎　馬鹿！
亀吉　有栖川、亀吉。
鶴太郎　馬鹿馬鹿！
亀吉　ごめん鶴太郎兄ちゃん。
登　有栖川鶴太郎、亀吉、良い名だね。
亀吉　…。
登　亀吉君、君とお兄さんが僕の命を狙う理由はなんだい？
鶴太郎　亀、言ってはなんねえぞ。
亀吉　（頷く）
登　…金だね？

二人が驚く。

登　やはりそうか。

一瞬の沈黙。

登　君たちは、卑賤の出かね？
鶴太郎　…だったらどうだって言うんだ！
登　…ヨネ。
登一郎　なんだろう、とっても嫌な予感。
登　あれを持ってきなさい、地券、今耕してる畑の権利証だ。
登一郎　ええ！
ヨネ　（丸めてた紙を出して）これかしら？
登一郎　出た。
登　（受け取って）これを持っていきなさい。
亀吉　…これは？
登　土地の権利証だ。畑の。これを君たちにあげよう。
亀吉　でも…
登　あとは苗を植えれば良いだけだから。茶を植えると良い。（握らせる）
亀吉　…。
登　行きなさい。

大島が何かを言おうとするが登の視線を受けやめる。鶴太郎は怒りを抱えながらさっさといなくなる。亀吉は行きかけて振り返り、一礼して去る。

登一郎　嘘つき！　ろくでなし！　博打うち！

登一郎が出ていく。
追おうとするヨシをヨネが止める。

登　というわけで、すまんな、ヨネ、また苦労をかけると思うが。
ヨネ　いーえ、いつものことですから。
大島　…。

気をきかせて隣の部屋に行くヨネ。ヨシもそれにならう。

登　…大島さん、すいません。
大島　あ、いや。

沈黙。

大島　んん、いや、しかし、連中の背後に何者がいるのかは聞き出すべきだったのでは

ないかと。
登　大島さんのおっしゃる通りだと思います。
大島　ではなぜ？
登　…引き受けるべきだと思うんですよ。
大島　引き受ける？
登　私は多くの人を殺めました。新撰組として。その恨みは引き受けるべきだと思うんです。
大島　しかし、それは戦争で…
登　戦争を言い訳にしたくはないんです。時代や戦争を言い訳にすることで自分のしたことを正当化も、うやむやにもしたくない。
大島　…しかし、せっかく開墾した畑まで。そこまでしてやる必要はあったのですかな。
登　私はかつて土方さんの命令で卑賤と呼ばれる人々と共に暮らしていたんです。彼らに志を説き、後に新撰組の同志として彼らを迎えました。そして、彼らの多くが戦乱の中で命を落としました。彼らは死んでいったのに私はこうして生きながらえている。
大島　でもまあ、志を持って死ねたのなら彼らも本望だったのではないですか。
登　志がなんです！　志があったら人は死んでも良いっていうんですか！　人の命より重い志なんてあって良いはずがない！　いえ、あってはならないんです！
大島　…。
登　あ、いやいや、いやいやいやいや。
大島　？
登　やめましょう、がらじゃない。
大島　そんなことは…
登　自分なりに色々と考えてはいるのですが、私は人に何か言えるような立派な人間じゃない。
大島　いや、ぜひ聞かせて頂きたい。
登　いや、ホントに。
大島　（真剣なまなざし）
登　…武士とは、戦とは、戦争とはいったいなんだったのか、人と人とが争う理由、人が人を殺す理由とはいったいなんなのか…そんなことを日々考えて暮らしてはいるのですがね。
大島　答えは出たのですか？
登　今のところの結論は…
大島　はい。
登　人間、腹が減るとろくなことがない。

沈黙

大島　…感動いたしました。

登　え？　どこに？

大島　争いの根源を辿れば食、食い物に行きつくとおっしゃりたいわけですな？　そもそも戦争とは食い物の争いだったわけであり、より多くの獲物、作物が取れる場所を巡って人と人とが争うようになった。それが時代が経るにつれて、人間が賢くなるにつれて複雑化していったと。そうか、考えてみれば幕末の黒船騒動だって元はと言えば鯨が目的だったか。鯨を捕まえるために港を解放しろと言ってきたんでしたなぁ。ん？　そう言えば先ほどの有栖川とか言ったかな、あの兄弟も金が目的で中島君を襲ったと言っていたな。見るからに貧しそうだったしな、やはりこれも食い物が理由と言える。うんうん、中島君、流石です。慧眼ですな。全てひっくるめて「腹が減るとろくなことがない」という言葉に象徴させたわけですな？

登　随分と想像を膨らませてくれたもんだなぁ。

大島　え？

登　いえ。大島さん、腹減ってませんか？

大島　おお、なぜわかるのです？

登　腹が減ると妄想が膨らんで冷静な判断が出来なくなったりもするのです。飯にしましょう。

大島　おお、それはそれは、せっかくなので御馳走になりましょう。

登　…あ～しかしまいったな。

大島　どうしたんです？

登　いえ、明日からの生活をどうしようかと。

大島　なんだ、そんなことですか。それでしたら私におまかせ下さい。今度、私の友人の旧幕臣達が、ここ浜松で質屋を始めるそうです。中島君もそれに参加してはいかがですか？

登　ほう、質屋ですか。

大島　はい。

登　やったことないですし、それも良いか。

大島　ぜひ。

登　いやいや、拾う神ありですな。

大島　はい。

登　ヨネ、明日からの仕事が決まったぞ。質屋をやることになったぞ。

二人は奥の部屋へ。

別の場所。
駆け込んでくる登一郎。
また地面にうずくまる。
甘利が現れる。登一郎の背中を見ながら何か考えている。一瞬懐に手を入れるが思い直す。

甘利　（咳払い）
登一郎　あ。
甘利　中島、登一郎君でしたね。
登一郎　あなたは、甘利さん。
甘利　失礼、全力で泣きじゃくりながら全力で走っているあなたを見かけたもので。
登一郎　…ああ。（涙をごまかす）
甘利　何かあったのですか？
登一郎　…。
甘利　私で良ければ、話を聞きますが。
登一郎　…父のことで、ちょっと。
甘利　父上のことで。
登一郎　はい。…私には、父のことがよくわからなくて。
甘利　確かに不思議な父上ではありますな。
登一郎　？
甘利　初対面の私に道場をくれた。
登一郎　ああ。
甘利　親子とは言え、所詮は他人、わからなくて当たり前なのではないですかな。
登一郎　…。
甘利　まあ、わかりませんがな、私は父を知らないもので。
登一郎　…父を、知らない？
甘利　ええ。幕末の混乱の中で命を落としたそうです。私がまだ幼い頃のことです。
登一郎　…そうだったんですか。
甘利　ええ。
登一郎　同じだ。
甘利　え？
登一郎　あ、いえ、私の父はあの通り生きていますが、その、なんというか、私は父に捨てられたのです。
甘利　ああ、そうでしたな。
登一郎　え？
甘利　いや。とにかく話してみてはいかがですか。

登一郎　話す、父上とですか？
甘利　はい。わからないことがあるのなら話す、聞いてみるんです。離れてる期間が長かったのならお互いわからないことがあって当然です。だからとにかく話すんです。
登一郎　話す。
甘利　ええ、本音でぶつかりあって。
登一郎　話す。
甘利　ええ、話せるうちはとにかく話すんですよ。生きているうちにしかできませんから。…私にはそれはもう出来ませんし。でももし父が生きていたら、やっぱり色々なことを話したいと思うと思うんです。

登一郎がガバと立ち上がり、感無量な表情で甘利の手を取る。

登一郎　甘利さん！　ありがとう！
甘利　あ、いや、お役に立てたのであれば…
登一郎　（手を握って）甘利さん！
甘利　え？
登一郎　（来い！　来い！　という手）
甘利　え？　あ、え？
登一郎　名前を…
甘利　ああ、登一郎さん？
登一郎　甘利さん！
甘利　登一郎さん！
登一郎　甘利さん！
甘利　登一郎さん！
登一郎　（離れて）甘利さん、ありがとう。

登一郎が去る。
隠れていた内山が出てくる。

内山　親も親だが、あのせがれもわけわからんのぉ。
甘利　ふん、だが、信頼は得た。
内山　どないんすんねん、せがれの信頼なんか得て。
甘利　わからん、だが利用価値はあるだろ。
内山　利用価値？
甘利　例えばだ…これからも頻繁に登一郎と会うことによって信頼を勝ち取り、いつのまにか登一郎は俺の事を親友と思うようになる。恋の話もすれば将来の夢なんかも

語り合うことになるだろう。登一郎にとってかけがえのない存在になったある日、奴の前で父親を殺す、その時の登一郎の顔と言ったら…

内山　（残念そうな顔をしている）

甘利　は！

内山　（首をふる）

甘利　逆に明る…

内山　明るない。

甘利　でも逆に…

内山　明るない、なんの逆やねん。

二人はいなくなる。

別の場所に鶴太郎と亀吉がいる。

鶴太郎　なんなんだよあのおっさん。

亀吉　…。

鶴太郎　オラたちのこと馬鹿にしくさって。

亀吉　…そうかなぁ。

鶴太郎　馬鹿にされたんだぞ亀吉、お前わかんねぇのか？

亀吉　…そんな感じはしなかったけどなぁ。

鶴太郎　馬鹿にしてるでねぇか！　オラたちはアイツを殺そうとしたんだぞ。それなのに、なんだこれ！　オラたちは物乞いではねえ！

亀吉　…。

鶴太郎　どんな理由があろうと人を殺そうなんて思っちゃいかん？　死んだ人間の命は重いぞ？　おめーにだけは言われたくねえ！

亀吉　それは…

鶴太郎　だってそうだろ？　アイツは新撰組だぞ！　ほんの十何年前は人を殺しまくってた奴なんだぞ！

亀吉　それはそうかもしれないけど…

鶴太郎　それだけでねえ！　アイツは甘利様の父上だって殺してるんだ！　それなのにオラたちに偉そうに説教しくさって！

亀吉　…兄ちゃん。

鶴太郎　？

亀吉　オラ、思うんだけどな、ひょっとして、あの中島登って人…良い奴なんじゃ…

鶴太郎　え？

沈黙

鶴太郎　亀。
亀吉　なあに？　兄ちゃん。
鶴太郎　これ（地券）、持ってけ。
亀吉　え？　兄ちゃんはどうすんの？
鶴太郎　甘利様についていく。
亀吉　駄目だよ兄ちゃん、あの人たちは中島登を…
鶴太郎　わかってる。
亀吉　わかってるって、わかっちゃ駄目だよ、そんなこと。
鶴太郎　兄ちゃんに逆らうのか、亀吉。
亀吉　でも、でも。
鶴太郎　せっかくもらったんだ、お前も一人でやってみろ、な。兄ちゃんも兄ちゃんで自分が正しいと思ったことをやってみっから。
亀吉　…うん。
鶴太郎　じゃあな。

鶴太郎は行く。
亀吉は動かない。手にした地券を見ている。
兄とは反対方向へ歩いて行く亀吉。

中島邸。
酔っぱらった登が大島に抱えられている。

ヨネ　すいませんねぇ、主人はお酒は全然でして。
大島　いえいえ、なんのなんの。
登　ははははは、おっぱい。

大島に寝かしつけられる。

大島　それでは私は失礼いたします。
ヨネ　なんのおかまいもしませんで。
大島　いえいえ、御馳走さまでした。では、また。

大島が去る。

ヨネも奥の部屋に消える。
いつのまにか甘利兵衛がいる。

兵衛　登。

登は眠っている。

兵衛　おい、登、起きろ。

登が目を覚ます。

兵衛　よ。

登　兵衛！

兵衛　やはり寝ていたのだな。お前のことだからそうじゃないかと思ったんだ。

登　兵衛、なぜここに来た。

兵衛　討手はお前なんじゃないのか？

登　…。

兵衛　抜けよ。

登　…なぜ逃げなかったんだ。

兵衛　逃げる？　逃げてどうする。逃げてしまっては俺の言葉は力を失う。（刀を抜く）

登　兵衛！

兵衛　登、今の幕府では異国からこの日本を守ることは出来ん。

登　そんなことは…

兵衛　（笑）何度も繰り返したな、この話は。

登　兵衛、今からでも遅くはない、逃げろ！

兵衛　それは出来んと言ったろ！　（切りかかる）

登　（避ける）兵衛！

兵衛　抜けよ登。

登　…。

兵衛　抜けと言っている！

登　…。

兵衛　ならば、これで終わりだ登！　（切りかかる）

登が置いてあった竹刀で兵衛を斬る。

兵衛が崩れ落ちる。

登　兵衛！

兵衛　…はは、斬られるってのは痛ぇなぁ登。

登　兵衛、お前なんで来たんだ。
兵衛　お前に、会いにな。
登　逃げることだって出来ただろ。
兵衛　お前のことだ、どうせ自ら志願して討手になったんだろ？
登　…。
兵衛　俺を討ちもらしたことにして、腹を切るつもりだったんだろ？　違うか？
登　…。
兵衛　お前の考えそうなことだ。
登　…。
兵衛　こんなやり方しか思いつかなかった、悔しいよなぁ。
登　もういい、喋るな。
兵衛　登ぃ、お前は生きろよ、俺の分まで。
登　わかった、わかったから喋るな。
兵衛　登ぃ、頼んだぞ、この国を守ってくれよぉ！　この国を…俺たちの…子供の…孫の代まで…豊かで…強い国に…
登　ああ！　ああ！

兵衛の呼吸が止まる。

登　兵衛？　兵衛！　兵衛！

登が兵衛の名を呼び続けている。

ゆっくりと明かりが落ちる。

登　兵衛！

明かりがつくとそこには土方がいる。

土方　大丈夫か？
登　…土方さん。
土方　うなされていたな。
登　…夢を見ていました。
土方　夢。
登　かつて、この手で友を斬ったときのことを。
土方　ふーん。

登　はい。
土方　甘利兵衛。
登　はい。
土方　なかなか出来る男だったそうだな。
登　はい。
土方　八王子という土地で倒幕を唱える。並の人間では出来んことだ。
登　はい、素晴らしい男でした。
土方　生まれたところが八王子でなければ、今頃は新政府軍でそれなりの役職についていたかもしれない。
登　はい。
土方　あちら側で黒田清隆の横に座ってたかもしれんぞ。
登　はい。
土方　惜しいよな。
登　惜しい？
土方　なんだ、いかんか？
登　いえ。ですが、兵衛は倒幕論者ですよ。
土方　（笑）まだそんなことを言ってるのか中島君は。
登　は？
土方　幕府はとっくの昔に倒れてる。この喧嘩はあちらさんの勝ちだよ。
登　いえ、ですが…
土方　…中島君、僕も多くの友人をこの手にかけてきた。
登　はい。
土方　今になって思うよ、アイツらが生きてたらこれからの世の中で随分活躍しただろうなってね。
登　…。
土方　君と違って後悔は無いがね。その瞬間その瞬間を必死で生きてきて、ぶつかって、命のやりとりの果てに、たまたま僕が生き残った。うん、俺の方が喧嘩が強かったってだけなんだな、きっと。
登　…。
土方　でもな、この広大な北の大地に立って初めて気がついたことがある。
登　それは？
土方　佐幕だの倒幕だの、この喧嘩は実に下らないものだぞってね。
登　そんな、我々は異国の侵略からこの国を守るために志をもって…
土方　それだ。志。それが実に危ういものだってことにようやく気がついたんだよ。志は必要だ。だが志だけでは駄目なんだよ。
登　土方さんのおっしゃってることがわかりません。

土方　中島君。
登　はい。
土方　女風呂は好きかね？
登　は？
土方　女風呂は好きかと聞いている。
登　土方さん、今は真面目な話をして…
土方　これ以上に真面目な話がどこにある。女風呂は好きか？
登　…好きです。無論、入ったことはありませんが。
土方　ふむ。ではあちらに女風呂があるとする。この女風呂は素晴らしいことに確実に覗ける場所があるのだ。
登　はあ。
土方　行きたいだろ？
登　行きたいです。
土方　うん。しかしここからその女風呂に行くためには二つの道がある。右の道と左の道だ。どちらもかかる時間は変わらない。君ならどちらの道を行く？
登　まあ、右でしょうか。
土方　いや、僕は左が良いと思う。
登　え？　かかる時間は変わらないんですよね、右の道で良いじゃないですか。
土方　いや、俺は左の道の方が近い気がする。
登　え？　同じなんですよね？　だったら右の道でいいじゃないですか。
土方　いや、駄目なんだ。僕は右は縁起が悪いんだ。
登　いや、縁起とかじゃなくて、同じなんでしょ？
土方　駄目なんだって右は、おじいちゃんの遺言なんだ。
登　そういうの良いですから早く行きましょうよ右から！　早くしないと誰もいなくなっちゃいますよ女風呂。
土方　むりむりマジむり。
登　いいから行きましょうって女風呂！　右から！　早く！　すぐに！　ホントに！
土方　え？
登　…。
土方　…。
登　こういうことだ。
土方　どういうことですか？
登　あの女風呂が日本を諸外国からの侵略から守るという目的だとする。幕府をかついで女風呂を目指すのが右側の道。幕府を倒してから女風呂を目指すのが左の道だ。
土方　あ。
登　わかるか？　我々は覗ける女風呂を目指して血みどろの殺し合いをしてたんだよ。

登　そんな…
土方　志とは女風呂に辿りつくこと。その為にどの道を選ぶかは志とは別のものだ。
登　…。
土方　我々が争っていたのはそんなことなんだよ。この広い大地に立ってみて、ようやくそれがわかった。世界を広く見渡して、広く使ってみれば、人と人とが争う理由なんてないのかもしれんなぁ。
登　…。
土方　…話してみたかったなぁ。
登　え？
土方　俺がかつてこの手にかけた仲間たち、京都で斬った勤王の志士たち、これから俺を殺そうしている新政府の連中。
登　…。
土方　…夜が明けたら最後の喧嘩だな。

土方がいなくなる。

登　ちょ、土方さん。

登一郎がいる。

登　登一郎君か？
登一郎　…。
登　どうしたんだね？　そんなところにいないで、家に入りなさい。
登一郎　父上殿。
登　なんだね？
登一郎　…話したい事があります。
登　話したい事。
登一郎　何をというわけではないんです。ただ話したいんです。父上殿と色々なことを。
登　…同じことを考えていたよ。
登一郎　え？
登　私も、登一郎君と話したいんだ。
登一郎　…。
登　ヨネも読んでこよう。それからヨシちゃんも。みんなで話さないかね？　な？
登一郎　はい！

登が奥の間へ。

登一郎　その夜、父はたくさんの事を語ってくれました。子供の頃のこと。親友を死なせてしまったときのこと。そして、父がかつて新撰組隊士であったということ。懐かしそうに、楽しそうに、時に涙を流しながら語ってくれたのです。父には何度も謝られました。もう本当に、何度も。僕が「もう良いですから」と言っても、何度も何度も。僕を捨てたのだって父なりに僕の将来を考えてのことだったというのも理解できましたし、博打を打ってたのも命令だったという事がわかった今、僕にはもう父を憎む理由はありませんでした。ヨネさんも泣いていました。ヨシさんも雰囲気で泣いていました。恥ずかしながら僕も泣いてしまいました。父が抱えていたもの、父の本当の言葉が聞けたことが嬉しかったのです。

そうそう、大島さんに紹介されて始めた質屋なのですが、案の定、父はあっという間に潰しました。貧しい人たちにお金を貸しまくり、返済の催促もしなかったわけですから当然と言えば当然です。

しかしながら、父はひょんなことから大金を手にすることになったのです。もうそれはなんというか、神が味方したというか、嘘みたいな出来事だったのですが…それについてはまた、今夜は父とゆっくり話をしたいので。

音楽

暗転

日付が変わっている。

変装した内山がヨネと話している。

内山　（地券を確認して）ふんふんふんふん。なるほど、確かに受け取りました。
ヨネ　どうもこの度はありがとうございました。
内山　いえいえ、こちらも渡りに船でしたからな。この浜松で質屋を開きたいと思っておりましたところ、こうして権利ごと店を売りたがっているかたに出会えたというのも、何かのご縁でしょう。
ヨネ　はい、もうホントに。
内山　しかしながら、奥方、これから先の生活は大丈夫なのですかな？
ヨネ　はい？
内山　いや、聞けばおたくの御主人は、剣術の道場をやっていたかと思えば、急に農業に目覚めたり、そして今度は質屋を始めたものの潰してしまいと、なかなか御苦労なさっていると近所の噂で聞いたものですから。
ヨネ　あ、もうそれは全然。
内山　しかし大変でございましょう。
ヨネ　大変かとも思ったのですけどね、世の中には信じられないことも起こるものでしてねぇ。
内山　はあ。
ヨネ　はい。
内山　…ま、では私はこれで。
ヨネ　はい、ありがとうございました。

内山が出て行こうとする。

ヨネ　あれ？　肉山さま。
内山　肉山です。
ヨネ　以前に、どこかでお会いしましたかしら？　どなたかによく似てらっしゃるような気が…
内山　うどんに似てるとはたまに言われます。
ヨネ　あ、おうどんだったんですね、言われてみれば。
内山　ははは、それでは、失礼致す。（去りながら一言）

石田が内山とすれ違う。

ヨネ　あら、石田さん。
石田　どうも。今のかたは？
ヨネ　お店を買い取って下さったかたですのよ。
石田　お店？　お店ってあの質屋のことですか？
ヨネ　あい。
石田　なんでまた。
ヨネ　いえね、うちの人ってば、こう質草って言うんですか？　持っていらっしゃるじゃないですか、お金を借りるためにお客様が商品を。
石田　はい。
ヨネ　最初はもちろん商品を受け取ってお金を貸してたんですけどね、そのうちそれがかわいそうだって言い出しまして。
石田　は？
ヨネ　確かに主人の言う通りですの。だって、わざわざ質屋にいらっしゃるってことはお金に困ってるかたなわけでしょう？　そんな、困ってる人から大切なものを奪うなんてことは私には出来ないって言いだしまして。それで何も受け取らずにお金を貸すようになったんですのよ。
石田　もはや質屋ではありませんねぇ。
ヨネ　そうなんですのよ、だから流石に私、言ってやりましたのよ、主人に。
石田　ほう、なんと？
ヨネ　「好き」って。
石田　おあ～。
ヨネ　やっぱりあの人のそういう優しいところに惚れてしまったんですね、私。
石田　ごちそうさまでーす。ですが、大変なのではないですか？　これからの生活はどうするんですか？
ヨネ　それがですね、これが、冗談のようなことが起きまして。
石田　冗談のようなこと？
ヨネ　あい。
石田　どういうことですか？
ヨネ　アレなんですの（葉蘭を指して）
石田　アレですか？
ヨネ　あい。
石田　葉蘭ですよね？　趣味で育ててるっていう。
ヨネ　新種だったそうなんですの。
石田　あ？
ヨネ　新種、わかります？　新しい種類っていう意味です。
石田　それはわかりますが、新種？

ヨネ　はい。育ててるうちにね、偶然新種が生まれたんですって。
石田　そんなことがあるんですか？
ヨネ　ええ、実際に。これがそうですのよ。
石田　ほ～、これが。
ヨネ　これがですね、品評会に出品しましたらね、金玉廉って名前を付けられまして、話題になりまして、買いたいっていう人が殺到しましてね。
石田　この葉蘭っていうのはそんなに人気があるものなんですか？
ヨネ　多いみたいなんですよ、好きな人は好きみたいでして。それでまあ、なんですか、これが親株って言いましてね、今はこれの子供の金玉廉を販売してるんですけど、これがもう売れに売れてしまって。
石田　は～。
ヨネ　今ではちょっとした小金持ち、どころの騒ぎじゃないわね、大金持ちって言って良いほどもうかってますの。
石田　は～。
ヨネ　この親株さえあればね、幾らでも生産できるものらしいんですのよ。だから打ち出の小づちみたいなものね。逆に言いますと、この親株は絶対になくしたり枯らせたりしてはいけないんですって。なのでこれは大事に大事にここに置いておきます。

馬のいななきが聞こえる。

石田　ん？　馬ですか？
ヨネ　はい。お金が有り余ってますのでね、今までできなかった贅沢をしようって、お馬さんも買いましたのよ、かわいいですよ。茶色くて足が四本ですの。
石田　はぁ。しかそんなことが起きるもんなんですねぇ。
ヨネ　ねえ。
石田　でも、これで今までの苦労もむくわれるっていうものですね。
ヨネ　あい。あ、石田さん。今日という今日はお代を払わせて頂きますからね。今までのぶんもまとめてお支払するから覚悟して下さい。
石田　はっはっはっ。それはもちろん…（妙な動き）
ヨネ　出た。
石田　（薬を押しつけ）奥方、ごめん！

石田が去る。

ヨネ　ああ！　でも負けない。いつかきっと…

登と登一郎がやってくる。

登　（悪い笑い）

登一郎　（悪い笑い）

登　登一郎、今日はもうかったな。

登一郎　いえ、父上、今日ももうかりましたね。

笑いが止まらない二人。

登　なんだか笑いが止まらんなぁ。

登一郎　父上、笑いが止まりません。まさか金玉廉がこんなに人気を博すとは。

登　これまでの苦労がようやく実ったということだなぁ。

登一郎　はい。

登　…登一郎。

登一郎　なんでしょう、父上。

登　今まで私は酷い父親だったと思う。ようやく一緒に暮らせることになったというのに迷惑ばかりかけて。

登一郎　父上。

登　本当にすまなかった。

登一郎　あ、父上、そんな、もう謝るのはやめて下さい。…正直、せっかく質屋を始めたというのにアホの子のように人に金を貸しまくり、それどころかうちの家具をよその質屋に預けてまで金を借りて人に貸してるのを見たときは、ちょっとこのジジイ一回ちゃんとぶっ飛ばした方がいいなとも思ったのですが、結果良ければ全て良し！　金が出来たんです、このまま金玉廉を売り続けて大金持ちになってやりましょう！

登　登一郎！

登一郎　父上！

お好きなだけどうぞ。

登一郎　…それに、実は父上には感謝してるんです。

登　感謝？　私に？

登一郎　父上がこの浜松に呼んでくれたおかげで、私には大切な人がたくさんできた。

登　大切な人？

登一郎　八王子にいた頃は孤独でしたから。僕には友人もいなかった。でも、今はなんでも相談できる友人がいます。それから…

登　　ひょっとして、恋をしているのかね？
登一郎　…。
登　　そうか。

馬のいななきが聞こえる。

登一郎　父上。
登　　なんだい？
登一郎　遠乗りに出かけませんか？　せっかく馬を買ったわけですし。それに、相談したいこともありまして。
登　　恋の悩みかね？
登一郎　はい。
登　　よし、行こう。

玄関に向かおうとすると物陰から馬が首を出しているのが見える。

登　　おや？
登一郎　あれ？

馬が金玉廉の親株を食べる。

登　　あー！
登一郎　わー！

馬が消えた奥に走り去る登、登一郎は追おうとするが止まり。

登一郎　父が新種の植物を発見し、それが品評会で評価され爆発的な売れ行きを見せひと財産築いたものの、馬に親株を食べられてしまいあっさり販売終了。冗談のような話ですが、全て実話です。こんなマヌケな人が元新撰組隊士だなんて言うのは息子の僕でさえ信じられませんでした。しかし、それからしばらくして、父が幕末の世を駆け抜けた志士の一人であること思い知らされる出来事が起きたのです。が、今は…うまー！

石灯籠に明かりがつく。

内山がいる。

鶴太郎がひざまずいて報告をしている。

鶴太郎　報告は以上です。
内山　なるほどの。
鶴太郎　はい。
内山　中島登の質屋のおかげで、お前の村の多くの人達が救われたと。
鶴太郎　はい。
内山　んー。
鶴太郎　どう思われますか？
内山　中島登か？
鶴太郎　はい。
内山　結論から言うと、まあ、なんや、お前の言う通り…
鶴太郎　はい。
内山　めっちゃええ奴やねんな！
鶴太郎　ですよね？
内山　あああもう一分の隙もないくらいええ奴や。なんやねんアイツ。おんねんな、あんな奴。逆にムカついてくるわ。
鶴太郎　逆にですか？
内山　おお、逆にな。
鶴太郎　…これからどうしましょう？
内山　どうしましょうってお前…甘利しだいやな。
鶴太郎　そうですね。

甘利がやってくる。

内山　おう甘利。
甘利　遅くなったな、すまん。
内山　久しぶりやの。なんや、道場の方が忙しいんかい？
甘利　まあな、登一郎が手伝いに来るようになってからは多少楽だが。
内山　ほーん。
甘利　質屋の件、上手くいったようだな。
内山　ああ、それはの。鶴太郎に人集めてもらっての。みんなでわっさ～金に借りに行ったらあっさり貸してくれた。売りに出した店の権利を買い取ったところまでは良かったんだがの。
甘利　ああ、登一郎から聞いてる。葉蘭とかいう植物で大儲けしたそうだな。
内山　それも馬に食われて終了ってことらしいがの。

甘利　（笑）鶴太郎、亀吉は元気にしてるのか？
鶴太郎　はい。新茶が取れたら甘利殿にも飲んでもらいたいと言ってました。
甘利　楽しみにしてるよ。よろしく伝えておいてくれ。
鶴太郎　はい。
内山　ほいで、なんや急用ってのは。
甘利　ああ、そのことだが。…資金援助が打ち切られた。
内山　え？
甘利　ああ。
内山　なんでや？
甘利　わからん。まあ、なんとなく想像はつくが。
内山　どういうこっちゃねん。
甘利　…きっと、もうどうでもよくなったんだろ。　…２０年近く前の恨みをいつまでも引きずるより、これからの日本のことに目を向けることの方が意義があると思ったんじゃないか。
内山　…そうか。
甘利　そういうわけだ。お前たちに金を支払ってやることが出来なくなった。
鶴太郎　…。
甘利　鶴太郎、今まで世話になったな。
鶴太郎　…甘利殿はどうなされるのですか？
甘利　…俺か。俺はな。…やるよ、中島登を。
鶴太郎　…しかし、甘利殿、こんなことを言うのは間違っているかもしれませんが…その、中島登は、良い奴です。
甘利　わかってる。
鶴太郎　え？
甘利　登一郎を通して色々探ってみたんだ。中島登は、かつて死なせてしまった友のことを思い、今でも苦しみながら生きているそうだ。他人に対して異様に親切なのも、新撰組の頃に多くの人を殺めた罪滅ぼしなんだろう。鶴太郎、お前の言う通り、中島登は良い奴だよ、きっと。でもな。…もうこれは意地なんだ。俺は奴を憎み続けてきた。憎み続けることで生きてこられたんだ。それが、例え中島登が善人だったとして、今までの人生が変わるわけじゃない。奴が善人であろうが悪人であろうが、父を殺され苦しんで生きてきた人生が報われるわけじゃないんだ。…だから俺は奴を殺す。…だからこれは俺個人の問題なんだ。お前らを巻き込むわけにはいかない。内山、長いことつきあわせてすまなかったな。

甘利が行きかける。

内山　なんやねん、それ、水臭いのぉ。
甘利　？
内山　のう鶴太郎、そう思わへんか？
鶴太郎　はい。
内山　甘利、父上の敵討ち、俺らもつきあうで。
甘利　いや、しかし、金が…
内山　なんや、俺らは金だけで繋がってると思っとったんかい、切ないのぉ。
甘利　しかし、鶴太郎、お前は…
鶴太郎　甘利殿の父上を思う一途な心、おらのような身分の人間も平等に扱うお人柄、そういうところにオラは魅かれているのですよ。…多少暗いと思うころはありますが。
甘利　…暗い。
内山　てなわけや、今後ともよろしくな。
甘利　（感極まっている）

内山と鶴太郎の顔から笑顔がこぼれる。

甘利　…内山。
内山　なんや？
甘利　うどん、食いに行かないか？
内山　おお、ええのう。
甘利　鶴太郎、お前もどうだ？
鶴太郎　ぜひ。

三人がわいわい消えて行く。

暗転。

花道を酔っぱらった登と大島と亀吉が歩いてくる。
酔っぱらいインプロがややあって。

大島　いや、いやいやいやいや、いやいやいやいや、私は中島君が羨ましい。君の生活には自由がある。
亀吉　そうそうそう、自由自由自由。
登　はははは、おっぱい。
大島　私のように役人なんぞになってしまうと、上司連中は薩長土佐の連中ばかりで肩身が狭いったらありゃしない。

亀吉　そうそうそう、ありゃしないありゃしないありゃしない。
登　おぱーい。
大島　しかしながら～私は～彰義隊の精神を～この明治の世に～正しき心を持って～あ～というわけで～歌いま～す。
亀吉　歌え歌え歌っちゃえって。
大島　ほげ～！
亀吉　死んじゃう、死んじゃうよ、誰か死んじゃうよ。
大島　亀吉、おい、亀吉。
亀吉　亀吉亀吉、もう亀吉だよ。ん？　オラですか？
大島　お前歌え。
亀吉　歌う歌う、歌うよもう。三千世界のカラスを殺し、主と朝寝がしてみた～い～
大島　かーかっかっか！　貴様それは長州の高杉晋作が作った歌ではないか！
亀吉　晋作晋作、晋作の晋作だよ。
大島　高杉も死んだ、みんな死んだ、だが我々は生きている。
亀吉　生きてる生きてる、みんな生きてるよ。
大島　生き残った我々がこれからの世の中を～お～中島君、つきましたぞ。
登　おーい、ヨネ、今帰ったぞ～。

三人ごちゃごちゃと家の中に入る。

途端に登と大島の顔つきが変わる。

大島　中島君。
登　ええ。
亀吉　どうしたんです？　お二人とも。

大島が踏み込み。

大島　何者だ貴様ら！　隠れてないで出て来い！

銃声。

大島が倒れる。

登　大島さん！

銃をかまえた内山が物陰から現れる。

内山　すまんのぉ元彰義隊のおっさん。おっさん邪魔やから少し寝ててや。
亀吉　大島さん！
大島　大丈夫だ、腕を撃たれただけだ。

甘利が現れる。

登　君か。
甘利　…。
登　兵衛の、父上の敵を討とうと言うのだね。
甘利　気づいていたのか。
登　ああ、君は兵衛によく似てる。顔がデカいところまでそっくりだ。
甘利　（真剣なまなざしで登を見つめながら顔の大きさを確認する）
登　私の家族は無事なのか。

奥からヨシ、登一郎、ヨネが後ろ手をしばられた状態で鶴太郎に連れられて出てくる。

ヨネ　あなた！
登一郎　父上！
亀吉　鶴兄ちゃん！
鶴太郎　亀！　全くよりによってこんな時に。
亀吉　何やってんだよ鶴兄ちゃん！
鶴太郎　うるさい！　亀、大人しくしてろよ。
登一郎　甘利さん！　なぜです！　なぜこんなことを！
登　私が彼の父親を殺したからだよ。
登一郎　え、じゃあ甘利さん、あなたが私に近づいてきたのは…
甘利　何か利用価値があるかと思ったからだ。まあ、道場を手伝わせるくらいの価値しかなかったがな。
登一郎　そんな、あんた暗いぞ！
甘利　うるさい！　鶴太郎。
鶴太郎　（頷いて登の刀を登の足元に滑らせる）
甘利　抜け。
登　（刀を抜く）…正太郎君。
甘利　なんだ。
登　安富さんや相馬さんを斬ったのも君かね？

甘利　なんの話だ？
登　どうなんだ。
甘利　金で雇われて旧新撰組隊士を狙っている連中は俺以外にもいるそうだ。
登　そうか、良かった。
甘利　？
登　銃は使わないのかね？
甘利　新撰組の誇りを砕くにはこれが一番なんだよ。
内山　死ねや新撰組！

内山が斬りかかり斬り合いが始める。

登は一人で内山と甘利と渡り合う。

幾合か渡り合ったとき土方と背中合わせになる。

土方　中島君、無事か？
登　土方さん。
土方　弁天台場が囲まれている。ここは君にまかせる。
登　行かねば島田君たちが死ぬ。
土方　では私も行きます。
登　いや、君はここに残れ。
土方　土方さん、死ぬつもりなんでしょう？　なら私もついて行きます。
登　中島君、これが僕の命の使い道だ。
土方　？
登　函館は良く戦ったよ。だが、もう限界だ。このままでは全滅だ。だが、榎本君は降伏を選びはしないだろう。なぜだかわかるかい？　…降伏するにはね、僕の首を差し出さなければならないからさ。
土方　じゃあもう土方さんは死ぬことしか選べないってことじゃないですか。土方さんが死ねば函館は降伏することが出来る、そういうことじゃないですか。
登　…そういうことだ。
土方　土方さん！　落ちましょう！　今は逃げて、生き延びて、それからまたやり直しましょう！
登　中島君、それはできんよ。
土方　なぜです！
登　僕は新撰組の土方歳三だぞ。

登　…。

土方　（笑）薩長の連中が作るこれからの日本がどんなものになるかは知らんが、そんなに悪いもんでもないだろ。

登　…死なんで下さい、土方さん。

土方　僕にあるのは戦の才能だけだ。これからの世の中には必要のないものだ。

登　私も、私も連れて行ってください！

土方　それはならん。

土方　中島君。…君には絵があるじゃないか。

登　…からかってるんですか、土方さん！

土方　君には子供がいる。

登　！

土方　次の時代、次の世代の為に生きろ。

登　土方さん！

土方　…中島君、命令だ。生きろよ。

土方がいなくなる。

登が狂ったように立ち回る。

内山　流石に強いのぉ。

登　どうした、こんなものか。そんな腕で新撰組に喧嘩を売ろうと言うのか。…甘利兵衛の息子の力はこんなものか！

甘利　く…

内山　…何様のつもりやねん。何が新撰組じゃボケぇ！

内山が銃をかまえる。

甘利　内山。

内山　お前らなんかただの人殺し集団やろうが！

登　…そうだ。

内山　死にさらせボケぇ！

内山が撃とうとする刹那、花道を石田が駆けてくる。

内山が登に向けて放った銃弾をあっさりと刀で弾く石田。

登　あなたは。
内山　なんやお前、何もんや！
石田　…。
内山　邪魔や、どかんかボケ。
石田　…。
内山　撃たれたいんかいわれ！
石田　…。
内山　じゃあ死ねやー！

内山が撃った銃弾を全て妙な動きで弾き返し、ついで内山に一撃を加える石田。

流れで大島に石田散薬も飲ませる。

内山　なんや、こいつ、バケもんや。
登　刃向わない方が良い、君に勝てる相手じゃない。
内山　いったいなにもんやねん。
登　藤田五郎、またの名を山口一、またの名を一瀬伝八、またの名を一戸伝八、またの名を山口二郎。
内山　どんだけまたの名を持っとんねん。
登　そして、またの名を、新撰組三番隊組長、斉藤一。

驚きの声が上がる。

石田　中島君、久しぶりだね。大島君もお元気そうで。
大島　撃たれてますけどな。
石田　こんなものが怪我のうちに入りますか。
登　斉藤さん、どうして？
石田　元新撰組隊士を狙った暗殺事件を追っていてな。君も狙われていることに気がついたので陰で見守っていたのだ。
大島　なぜ陰で見守る必要があったのです？
石田　…。
大島　変装してまで。
石田　これは……趣味だ。

石田が内山に寄る。

石田　骨は折っていない。一応これを呑んでおけ。
内山　石田散薬？　効くんかい、これ？　（飲む）
石田　新撰組副長土方歳三の実家で作っている薬だ。新撰組はみなこれを飲んで怪我を治していた。
内山　ふ～ん、じゃあ効くのかもしれんの。
石田　知らん。
内山　知らんのかい。
石田　（手を出して）５０銭になります。
内山　金とんのかい！
石田　…中島君、連中の処分は君にまかせる。
ヨネ　あ、石田さん、お代を。
内山　いえ、（絵を手に取って）かわりにこれを。でわ。

内山が去る。

登　正太郎君。来なさい。
甘利　…。

二人が立ち合う、登が勝つ。

甘利　…まだだ。

立ち合い、再び登が勝つ。

甘利　まだまだ！

登が甘利をふき飛ばす。

甘利が懐に手を入れ銃を出す。一瞬の間の後、それを床に置く。

甘利　行くぞ。

登は甘利の刀を飛ばす。

甘利は座り込む。

甘利　……くそっ…くそっ……

登　正太郎君。私は君にこの命をくれてやっても良いと思っている。だがな、私のこの命は私だけのものではないのだ。私の中に二人の男がいてな、君が連中を越えてくれんことには、この命をくれてやるわけにはいかんのだ。　…一人は甘利兵衛、君の父親だ。

甘利　？

登　私は兵衛に命を救われたのだよ。

甘利　父が貴様の命を救っただと？

登　そうだ。兵衛は私を救うために私に斬られたんだ。

甘利　嘘だ！

登　嘘ではない。

甘利　信じられるか、そんなこと。

登　信じなくてもいい、だがそれが真実だ。

甘利　そんな…

登　兵衛は私に生きろと言った。だが私は友を殺した自責の念に堪え切れず、死に場所を求めて新撰組に入隊した。しかし死ぬことは出来ず、戦い続け函館にまで辿りついた。ようやく死に場所を得たと思ったのに、そこでも私に生きろという人がいた。　…みんな先に死んでいったくせに、私にばかり生きろ、生きろと言う。…だが私は生きること選んだ。それが友の願いであり、命令だからだ。正太郎、この命、軽くはないぞ、君に背負えるか？

甘利　…。

登　…許してくれとは言わん。君の気のすむまで、この命、狙うといい。

甘利が内山の肩を抱え去ろうとする。

鶴太郎もそれを手伝う。

甘利　…中島殿、一つだけ聞かせて頂けますか？

登　なにかね？

甘利　父は、どのような人だったのですか？

登　……最高の男だったさ。友を思い、国を思い、次の世代のための世の中を築こうとした、優しくて大きい、最高の男だったよ。

甘利　…そうですか。

登　ああ。

甘利　…でわ。

三人が去っていく。

登が崩れ落ちる。

音楽。

暗転。

日付が変わっている。

登とヨネ、亀吉がいる。

板に何かを書いている。

登　…これでよしと。

亀吉　おお！

登　ちょっと端を持ってみてくれるか？

亀吉と登が板の両端を持つ。

板には「中島鉄砲火薬店」の文字。

登　ヨネ、どうかね？　中島鉄砲火薬店。

ヨネ　良い響きですね。

登　ああ。

亀吉　中島様。

登　なんだい？

亀吉　なんで鉄砲屋に決めたんですか？

登　なんでと言われると困るのだが…

亀吉　新撰組として剣に生きた中島様が鉄砲屋になるなんて、なんだか物語を感じるではないですか。

登　そうかなぁ。

亀吉　刀を銃に持ち替えてって、ねえ？

登　そんなんじゃないよ。僕が扱うのは猟銃だよ。

亀吉　あ～

登　…ただ、まあ、使い方を間違えないようにはね…せめて自分の手の届く範囲くらいは…。

登一郎とヨシが奥の部屋から手を握りながらやってくる。

ヨネ、登、亀吉は「ええ？」

登一郎　父上、実は相談があるのですが…

登　恋の相談かね？

登一郎　はい。

登　相手はヨシちゃんだね？
登一郎　なぜわかるのですか？
登　登一郎も案外手が早いんだねぇ。
登一郎　そんなことは…
ヨネ　血ね。
登　え？
登一郎　実はヨシさんと一緒になる場合、戸籍上は叔母と甥が結婚するということになるわけですが、それが法的に問題ないのかどうか相談したかったんです。
登　大島さんに相談してみよう、あの人は裁判所に勤めてるんだから、そういうことにも詳しいだろう。
登一郎　ああ！　そうですね、そうしましょうヨシさん！
ヨシ　はい！
登一郎　好きだ！

刀をかまえた甘利、内山、鶴太郎がやってくる。
今にも斬りかかりそうな真剣なまなざし。

ヨシ　あら。
ヨネ　そっか、今日は（その日の日付）か、月に一度の復讐の日でしたねぇ。
ヨシ　お姉ちゃん、甘味屋さんに行こう。
ヨネ　うん、そうね、お邪魔しちゃ悪いし。
ヨシ　あの職人さん、羊羹の味がよくなったのよ。
ヨネ　そうなの？　じゃあ今日は羊羹にしようかしら、二人前。うふふ、なんせ今は二人分ですからねぇ。
甘利　奥様。
ヨネ　あい。
甘利　おめでとうございます。

内山と鶴太郎も続く。

ヨネ　ありがとうございます。それじゃ…

ヨネとヨシはいなくなる。
登一郎も刀をかまえている。
登も抜いている。
大島がやってくる。

大島　いや～すまんすまん、遅れた遅れた。
内山　大島殿、遅刻は厳禁でござる。
大島　いやいや、誠に、申し訳ない（言いながら刀を抜く）
甘利　中島殿。
登　なんでしょう？
甘利　誠に勝手ながら、来月の？日は他の道場との試合と重なっておりますゆえ、一日ずらして頂けるとありがたいのだが。
登一郎　私も参加しますゆえ、そうして頂けると助かります。
登　みなの異存が無ければ、私はかまわないが。
内山　私も店の棚卸ゆえ、逆に有りかと。
鶴太郎　茶畑に関しては
亀吉　問題ないです。
大島　午前中であれば助かります。
登　では来月は？日の午前中ということで。

それぞれ「承知」だの「承った」だの。

鶴太郎　亀、今月はどうすんだ？
亀吉　（刀を抜いて）じゃあ今月はこっちの味方。
甘利　…それでは。
登　（頷く）
内山　行くぞ新撰組！
甘利　中島登！　父の敵、討たせてもらうぞ！
登　（ゆっくり上段に構えて）新撰組伍長、中島登、まいる！

それぞれ気合いの声を発する。

木が入り、登一郎以外が止まる。

登一郎　ちなみに、父が始めた中島鉄砲火薬店は父のひ孫、つまり私の孫の代まで続き、２００４年にその看板を下ろすまで、怪しい人には絶対に売らない猟銃店として地域の人達に信用され愛されたそうです。父の描いたそこそこの絵は戦友絵姿と名付けられ函館五稜郭の資料館におさめられています。

長い木が入る。

幕